
魔王と勇者のタクティクス

kamome23

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と勇者のタクティクス

【NZコード】

N7366X

【作者名】

k a m o m e 2 3

【あらすじ】

本が読むのが大好きな青年がいた。

そんな青年が突如穴に落ちた。

そこには、薄気味悪い塔には似合わない一人の少女がいた。

そして突然「私たち……魔王軍を救ってください」といわれ、

そして青年は返事をして……

勇者の役を買って出た青年と魔王の娘が作り出す。
とても壮大な戦略とは……！？

第一話 「てか……魔王の娘が勇者を召喚してやるいだろ……！」

俺の名前は、両羽巧といつ。

学校行きながらでも本を読み。

帰つて来ても本を読むそんな生活を送つてゐる。

ちなみに愛読書は「孫子の兵法」だ。

そんな読書好きでさうに戦略本や兵法書などをこよなく愛す。俺は、時々生まれてきた時代を間違えてんじやないかと思つときもある。

そんな俺は、今日も孫子を読みながら、学校からの帰り道を歩いていた。

「兵とは国の大事なりつてね、ああ一度でもこいからこんな時代に行つて兵隊を使いたいな～」

そんなことを考えて歩いていたため田の前に大きな穴があるのも気づかなかつた。

「わあ～～～

そのまま俺は落ちて行つた。

時は少し迫のまゝ、

「えーとまづは、河童の涙に……」

薄気味悪い塔には似合わない水色の髪の少女がいた。

「えーと次は…竜の糞…うわくそ！」

周りには誰もいなくてただ少女が必死に何かの準備をしていた。

「あとは、この黄金をつと、これで勇者を呼び出せる。」

その少女は目が輝いていた。

彼女の名前はエリス。

なんと魔王の娘。

「うんしょ、うんしょっとあと少しで完成する。魔法陣で勇者を呼び出して救つてもらわないと……」
エリスは、必死に混ぜて

「できた！」

ついにできたのだった。

それを周りに流し込んだ。

「よし完成した！」

周りには、紫色の魔法陣が描かれている。

「今ここに召喚の儀式を開始す。勇者を現世界へと呼びたまえ。」

上に大きな穴が開いた。

「わあ～～～

突然大きな声にびっくりはしたが、一人の男が落ちてきた。

「この人が勇者様……」

「いてて、なんだこりは？」

周りを見渡すと、薄気味悪い石でできた部屋の中にいた。

あなたは勇者様なのでですか？？

「まあ、うーん、何が？」

タクミは、状況が呑み込めず。ただ突っ立っている。

「あなたがです」

備力！！

〔メモ〕

タクミは、いきなり勇者と言われても何のじとかよくわかつていな

し
!

勇者を呼び出す儀式を行ったのです。

卷之三

エリスは、泣きそうな顔をしながら言った。

「和たせ」魔王軍を救ってくたわい」

その寺タクミは、

その時久松三郎は急に腰を宣る間にて、さう言ひ相手で困惑して、

「はい、もうです。」

「え～と何で？」

「私のお父様の魔王が、神族の裏切り行為にあい、死んでしまいました。そして今私が魔王の代理をやつています。」

「お前、魔王の娘なの！？？」

タクミは、目の前のかわいらしい少女が魔王の娘なんて信じられなかつた。

「はい、それで、そのために私たちは、最後の希望を託して勇者様をここに召喚したのです。」

「てか…魔王の娘が勇者を召喚しちゃまずいだろ…。」

「確かに」……

顎に手を添えて納得したような顔になる。

「いまじろかよ……」

タクミはこのかわいいらしげ魔王様に呆れていた。

「しかし…そんなだけピンチなんですね…。」

「どれくらいやばいんだ！？」

「魔王軍は、分散してしまい今私のもとここにいるのせ、たったの5千です。」

涙ぐんだ田で行つてくれる。

「5千でもすごいな、もともとどれくらいたんだ！？」

「100万です」

「はあ！100万！…どれだけ減つていいんだよ！！」

100万という数字を言われてタクミは、腰を抜かす。

「ほめたり、怒つたりどつちかにしてください」

「いや、だつて……なつ！」

「なに憐れんだ田で見てるんですか！！」

「仕方ないだろ！」こんなこと聞いたんだから。

エリスがタクミに詰め寄り

「それで助けてくれるんですか？？」

「それは置いといてだ。もし俺が帰りたいと言つたら返してくれるのか？？」

「それはちょっと……召喚はできたのですが、戻すのは……」
下を向いて返事をする。

「やっぱりな」

タクミはため息をついた。

「『のまま、『にいるしかないんだから協力してやひつー』
ものす』」と喜んだ顔で

「本当ですか！？」

「ああ」

「やつた――――」それで百人力です
手を挙げてバンザイのポーズを何回もしている。
「いや……ちょっと待て……俺は力なんて強くないし武術なんて少しか
じつたことがある程度だぞ」

自分の手を組んで広げる動きをして

「えつ……じゃあ、一撃必殺技とか、半径5キロメートルを焼き切
くせる魔法とかは？？」

「おこおこ、どんだけ勇者に夢見てるんだよ……」

「本当ですか！？」

「本当だ。俺は腕っぷしは弱い……ただし作戦を考えるのは得意だ
ぞ」

「そうですか……しかし、『に』で勇者を復活できたといわないと士
氣にも影響が出ますしつ……」

エリスが目をつむりながらせきててきたのに負けた巧は
「わかった。わかったよ、勇者の役やつしてやるよ……」

「嬉しいです！」

エリス踊っている。

「まあそんなに喜ぶなよ期待できるほど強くないんだから…」「それでもいいです！！」

タクミは、何かを思い出して物ふけな顔をする。

「まあいいけど、置いてきた妹が心配だな」

「妹さんがいるんですか？」

「ああ、俺とは正反対の感じで、腕っぷしが強くて戦闘になつたら真っ先に突っ込んでいくようなやつなんだが…いれば楽なんだがな…」

タクミは四人家族で武道家の父親にアクション女優の母親から生まれてきた。

なんでこんな親から俺が生まれてきたのか不思議で仕方ないとタクミは思っている。

「召喚では、呼びませんし仕方ありませんよ」

「私の名前は、エリスです。」

「俺の名前は、タクミだ。よろしくな」

「よろしくお願ひします。」

エリスは、考えて

「それなら、静かで安全な場所を求めるつていうのはどうですか？」

「そうだな、まあいいや。それより田標は？？」

「田標ですか？？」

「そうだ。何事の居ても田標があつたほうがいい」

エリスは、考えて

「それなら、静かで安全な場所を求めるつていうのはどうですか？」

「はあ～～そんな甘いこと言わずにもつと大きな田標もてよ…！た

とえばこの世界を奪つてやるとか

「そんなのいやですよ…」

よっぽど嫌だったのか、語気が強くなる。

「つべこべ言わずにもう決定した。よし田標は…」

タクミは、リストのことを少しだけ考えて

『世界をぶんびいで静かな世界にでもするーーー。』

やつして、魔王と勇者が手を組んだ。

第一話 「全員、川に飛び込め……！」

「世界をぶんぢって静かな世界にわせるつてなんですか……」
エリナがとても怒ったような顔をしている。

「いやーだつて、エリス言つたじやないか静かな場所を求めてるんだろ」

飛んだり跳ねたりして髪を上^アさせながら

「そうですけど、それと世界をとるは関係ありません。」

「いや、手つ取り早い方法だ……！」

タクミは押し切る。

「どこかですが……もういいです」

「ふく
脹^{ふく}れた顔になつてしまつた。」

「そんな事よりエリス今の魔王軍の状況を教えてくれ
「そんなん聞いてどうするんですかー」

まだすねている。

「世界を取らないといけないからな！」

さげすんだ目で

「まだそんなこと言つているんですか？今は神族によつて統治せ
られていて、それを人族が勝手に魔族を追い立てていてるんですから
エリスの言葉や視線を無視し

「なるほどな！敵は神族かー！それなら人族を仲間にした方が手つ
取り早いな！」

「何勝手に話を進めているんですか……！」

「よし、これで倒す相手は、神族からだな。」

「もう人の話聞いてくださいよ！」
エリスが腕をぶんぶん振っている。

「まあそれより。この世界って魔法があるのか？」
「はいありますよ」

ちよつと語気がすねている感じに聞こえる。

「例えばどんなんがあるんだ？？」
「そうですね」攻撃魔法から、防御魔法、補助魔法、儀式魔法なんかがメジヤーですね」

そこいらへんは俺のいる世界のRPGと変わりないな…
俺のいるじやなくて俺のいた世界か… いって悲しくなる。

「なるほど、次に兵種は？」

次々とタクミが質問するがエリスは、仕方がないという感じで返答をする。

「今味方にはいるのが、ゴブリンとかスケルトン、リザード【ウイッチがいます。】

「それぞれの特性は？？」

「えーと、『ゴブリンが棍棒と』が武器で……スケルトンは、防御が最弱だけど何回でも生き返れる。そして、リザードが頭がよくって。ウイッチが魔法使いつて感じ。」

「なるほど」

「よつする」、

ゴブリンが雑魚歩兵。

スケルトンが「」。

リザードが指揮官タイプ。

ウイッチが魔法攻撃つて感じか……意外に心もとない魔王軍…

「本当はまだほかにもいるけど、どつかに行つちゃつた」

「それなら、これから仲間にすればいいことだから大丈夫だ。」

「仲間につて本当に世界を取るつもり?」

エリスは、タクミの言つていることを鵜呑みにできなかつた。

「ああ本当だ」

「変な勇者を呼び出しちゃつたよ〜〜」

「お前が呼び出しておいて嘆くなよ」

タクミが拳骨（ゲンコツ）を一発かます。

「いつた―――暴力反対だよ!…」

エリスは、頭を押さえている。

「本当に魔王の娘なのかこいつ……そんなことはさておき次は敵だ。まずは一番の目標である。神族について教える!…」

「はいはい」

エリスが諦め顔をする。

「神族は、一番トップがオーディンでその下に11人の部下がいる。その部下がワルキユーレで騎士と魔法使いがいて、攻撃力防御力ともに高い。」

「ちょっととまて…それってかなり厳しくないか…」

「そりなんだよ!あと神族はみんな空を飛べるから

「なに!空からの攻撃ありだとどんなにチートな種族なんだよ」

タクミは、神族と戦う場合そういうの被害をもたらすと考える。

「でも、神族はあまり戦いに介入しない。」

「それは、本当か? ?」

安心したような顔になる。

「うん、人族が神族の配下になつて魔族を攻めているの

「なるほど…それで敵の本拠地は? ?」

「神界」

エリスがたつた一言ボソソッとつぶやいた。

「神界！？深海じゃなくてか！？」

エリスに詰め寄る

「そうです」

「それなら攻めようがないじゃないか」

「うん…でも一応地上の拠点があります。」

エリスが言つてから考えもせずに

「よしそこを攻略する目標に入れよう

「本気ですか！？」

「ああまつてるよ～～神族！～！」

片手を上にあげる

その時ゴブリンらしき奴が慌ててこちらに来た。

「大変です。魔王様！！人族の襲来です。どうすればいいでしょうか？」

「なんですって！！」

エリスが青ざめる。そしてタクミがさつき話していることを思つて出し

「おいおい、5千もいるの簡単に突破されすぎだらう

疑問をぶつけてみる

「いや、主力は河口において来てします。今は50しかいません。」

「はあ50！～おいそこのゴブリンA～敵兵力は！？」

タクミもこの状況に内心焦る。

「ワイは、ゴブリンAじゃないジヨンだ。」

「名前はどうでもいいから敵兵力は？」

「約一千！」

「どうしましょ～～タクミさん」

瞬間に作戦が思いつく。

「それならいい作戦があるぜ～」「なんですか」

エリスが目を輝かす。

「孫子の兵法にも書いてあつたが、敵が十倍以上の場合は、逃げるべしつてな」

「それって……」

エリスは、わかつてしまつたがわかりたくない顔をする。

「おうそうだ！――」そこから逃げるぞ――」

「でもどこに？？」

エリスは、タクミが逃げるといつたのでどこに逃げるか不思議だつた。

しかし、タクミはさも自然化のよつて

「たしか河口に主力がいるんだろ」

「そうです。でもそこまでの道が敵に包囲されていて川しかありませんよ」

「それなら川を下るしかない」

「どうやって船とかありませんよ？」

エリスが考へている川を下る手段は、船しか思いつかない
「俺に任せろ！――とにかく撤退だ――」

「どうすれば……」

ゴブリンAは困っていた。

「タクミさんに従つて川まで逃げます。」

エリスは、タクミにかけてみるとこにした。
勇者として呼び出されたタクミを・・・

「へい！」

ゴブリンAが走つて行つた。

「タクミさん川はこつちです。」

「おう！さすが頼りになるな！」

二人は、走つて外に出て周りにいた魔族とともに川へと向かつ。

2人 + 50人は、川にたどり着く。

川の広さは、そこまで大きくないが川の流れが速かつた。

「これからどうすれば？？」

「よし、魔王の娘なら魔法位使えるだろ？」

「はい！…」

「それならここらへんにある木を全部切つて川に流せ……！」
「できますけどどうするんですか？」

「みんなよく聞け、川に流されてる木にしがみついて流されろ～！
！」

タクミは、大声で叫んだ。

「本気ですか！？」

エリスも、タクミに負けないぐらいの声で言つた。

「本気だ！みんなは生き残りたいだろ？ それなら一緒に行こう～！

！」

この絶望的な瞬間をなくせる期待が大きかつたので賛成の嵐だつた。

「「「「「おお——————」」」」

この様子を見たエリスが

「本当にやる気なんですねわかりました。風の大きいなる力を鎌鼬かまいたちと
なれ！…」

その呪文とともに周りにある木が切れて川の上の空中を待つて着水した。

「さすが、魔王の娘だけあるな」
「それほどでも」
少しテレるエリス。

「全員、川に飛び込め　　！！」

「　　「　　「　　「　　「　　おお――――――――――――」」」」」」

バシャーン

一斉に川に飛び込んでいく。

「エリス！俺につかまれ！！」
タクミがエリスと手を握る。
「えつ！えつ！」

「大丈夫だ死ぬときは一緒にだから――！」

「そんなの嬉しくもありません――ん――！」

バシャーン

そしてタクミとエリスは川の中えと消えて行つた。

第三話 「部隊編成をなめるなーーー！ 基本中の基本だぞーーー！」

「エリス！俺につかまれ！！」

「えつ！えつ！」

一 大丈夫だ死ぬときは一
緒だから！！

— そんなの嬉しくもあらまや — — ん!!」

そしてタクミとヒリスは川の中えと消えて行つた。

「ふぐふぐ……ふはっ……タク//やえ？」

エリスが必死に才にしがみついている
ただし、魔法を使ってずいぶん楽な状況を作り出している。

「タケミさん……？」

エリスは木にしがみつきながら、周りを見渡そうとした。

「タクミさん……！」

「俺は……」ううだ!」

聞こえたほうを見てみると確かにいた。

「タクミさん大丈夫ですか？」

タクミは、ちよつと木と木の間に挟まっていた。

「本当にですか？」

「ああ大丈夫……いややつぱだめ、エリスもつ一本の木を飛ばしてくれ……」

「ええ……でも、誰かいたら困るじゃないですか……？」

「大丈夫だ誰もいないから！」

タクミはまつたく見ずに返事をした。

「本当にですね！？」

「早くしてくれ……！」

悲痛な叫びが水で響いた。

「もうわかりましたよ！風の理に^{じぶんぢぶん}おいてそれをつかやぶる突風となれ……！」

エリスがいつた瞬間片方の木が飛んで行つた。

「助かつたぜ～」

タクミはエリスと一緒に木へと移つた。

「なんだとばされてハリマンね～～！」

なんか真上に向かつて飛ばされている物体がある。

「なんか聞いたことある声だな、あああの時のゴブリンAか……！」

「どうしましょう～？」

エリスが慌てている。

「それくらいで死んじゃあそこまでだつたんだ。ありがとよ～ゴブ

リンA」

手を振る。

「死んでおりまへん～！」

ゴブリンA^{ジョン}が、別の木へとしがみ付いて言った。

「おお生きてたか～～ゴブリンA～～死んだかと思つたぞ

「勝手に殺さんとこでやーーーあとねこは、ジョンやーーー」

「あどぞれくらいいだ??」
ゴブリンAの突つ込みを無視したタクミは、

「十の「一」から二又アラ」

「そうですねあと数分でしようか」

「よし! その時が来たら、この木を飛ばしてくれ!!!」

「何でですか？」

タク//の言ひて云ふと

信じることにした。

タウニが大吉で叫んでいた。

「木を離して、泳いでけ―――！」

全員不満そうな顔をしたが、方法がなかつたため泳ぎだした。川岸には、味方らしき魔族が縄を投げたりしている。

—エリスしげかりつかまれよ！！！」

卷之三

エリスとタクミは一緒に川に飛び込んだ。

151

川の流れが思つたより強く流されかける。
タクミは、二んな持て運動神経が良ければと嘆く。

「エ...リスト...ふはつ...何とかしろ...」

「……そんな……こと……い……れ……ても……無責任な！」

「……いいから……はやく……魔法……を使え……！」

「……最初から……つかえ……ばよかつた……のに……」

タクミは、この世界で魔法を使えることをまったく頭に入れていないかった。

タクミが心の中で

「ここには、魔法を使えることを頭に入れておかないと」

と思つた。

突然軽くなつた。

「何で！？」

隣を見てみるとエリスに周りが光つていて

それで、タクミはエリスが魔法を使つたのだと気づいた。
タクミは、川岸に行こうと必死に泳いだ。

エリスを抱えて、

「あれ……重い……」

エリスを見ると周りの光が弱まつてきた。

「やばい！！」

タクミは、エリスの魔力が少なくなつてていると思つた。

「早くいかないと！……」

その後すぐに繩をつかんで何とか岸に上がる事が出来た。

「はあーはあー……大丈夫か？エリス？？」
エリスの様子を見るとぐつたりしていた。

「おい、起きる……」

バンバン

背中を思いつゝきり叩く。

そつすると、

「「ほっ！ げほっ！ いきなり叩かないで下さ」「よー！」

咳き込みながら怒つて いるエリスの様子を見て、ほつと一安心するタクミであった。

太陽が真上にあるから、曇ぐらいだな

「エリス様～～～～～！」

大声で叫んで いるトカゲみたいなのが一足歩行で歩いていた。

「ああジョージさん！」

「大丈夫ですか？ エリス様！ ？」

「はい何とか」

「あの…エリス。こいつ誰だ？」

「この人は、リザードのジョージさんです。昔から指揮を執つてもらっています。」

「なるほど」

「こやつは誰ですか？」

ジョージは、あやしい目でタクミを見た。

「この人は、勇者様です。」

「こんな、何も取り柄がなさそつた奴がですか！？」
訝しそうな目でタクミをまだ見ている。

「なんだ！？ リザード！？」

挑戦的な態度で打つて出るタクミ

「わしの名前は、ジョージだ！！」

「わかつたが、俺が勇者様だ！！」

「そうです。ジョージさん。この人が本当です。」

「エリスがタクミに肩入れしたので

「それなら信じましよう。」

ジョージは渋々頷いた。

「それで、生き残った人はどれくらいですか？」

エリスが聞いている部下思いな魔王様のなのだ。

「はい… 31人です。」

「そうですか……」

表情が重くなる。

「それでも、包囲された状況からみると、ましです。」

「そういうてくれると助かります。」

「さすが、頭がいいだけはあるな…」

「タクミさんこれから、どうするんですか？？」

「うーーんとまずは、部隊の再編だな。」

「そんなことするんですか？」

「部隊編成をなめるなー！！基本中の基本だぞーーー！」

「確かにそうですね… それなら賛成です。」

「ジョージさんも賛成なら…」

おそるおそる承諾するエリス。

「ああまずは、部隊再編からだーーーリザードロ一緒にがんばるぞーーー！」

「ジョージだーーー！」

そうして、無事生き残った魔王と勇者は、部隊再編を始めるのだった。

「何か最初からみみつちいな」

第四話 「神族つておつかないな……」

「それでですね。タクミ殿……言ひにくいことなんですねけど……」「何だ? ジョージ? ?」

「エリス様が、召喚の儀式を言つてゐる間に、魔王軍の大半が逃亡してしまつて、今800しかいなんですよ……」

「何でそのことを早くいわない! ! !」

タクミの叫びが木靈した。

「えつ! 本當ですか! ?」

「はい……エリス様今残つてゐるのは、古参の兵隊ばかりです。」

「そうなんですか……」

エリスが悲しそうな顔をする。

守つて行こうと思つてゐる矢先に集団逃亡したからだらう。

「それなら、別いいじやないか、それに残つてゐる奴らは、古参なんだろ! ?」

「そうですね」

「新兵が、どんなにいよつとも経験をつんだ奴らには、勝てないからちようどいいかもな。それで、残つた兵力は?」

タクミにとつては、過去より今のほうが対背だつた。

「はい、ゴブリンが600、スケルトンが100、ウイツチが150、リザードが50です。」

「なんか……スケルトンがすごい抜けているな……。よしわかつた、密に編成してくれ、戦闘部隊と特殊部隊、それに近衛部隊だ。」

「その……特殊部隊とは?」

初めて聞く言葉だらうから、簡単に説明をする。

「もつとも危険な任務をする部隊だ。だから、有能な奴を選んで、

そつから志願制にしてくれ。近衛部隊はエリスの護衛専門だからそこまで兵力をさかなくても大丈夫だ。」

「わかりました。エリス様は、それでよろしいですか？」

「はい、指揮はタクミさんに任せようと思うので…」

「それなら、ただちに編成をします。」

リザードンは、走つて消えてつた。
ジョージ

「なあエリスこの近くに町はあるか??」

「はいありますよ…でも何するんですか?」

「そりや、野宿はいやだから泊るところを探すんだ。」

手をぶらぶらさせて疲れていることをアピールする。

「なるほど……ってここの人たちを置いていくんですか！？」

「そりや、魔族がいつたら。即戦闘になつちまう、その分人族に見

える俺たちなら大丈夫だろう」

「そうですけど…おいていくのは……」

とてもためらいがある様子で悩んでいる。

「大丈夫だつて」

「そうですか…」

「おい、そこのゴブリン」

「はいな」

また、同じ顔を見て

「つて、ゴブリンA生きていたのか??」

「先ほどは、ありがとうな、わいを飛ばしてくれて…」

笑いながら眉間に上げている。

「まあ…気にするな…！」

「気にするわ…！」

ジョンが近くにある角材を持った。

「二人とも落ち着いて」

取つ組み合いを始めようとしていた。

「魔王様に免じてゆるす。」

「誰がお前に許してもらわなあかん！…」

「もう……一人ともケンカしないでください……ジョンさん私たち
は近くの町まで偵察しに行くので、今日はここに戻ってきません。」

「おお～～魔王様に名前をおぼえてもらつた…感動や～～」

涙を流している。

「それじゃあ、とつとと行こうぜエリス」

「はい」

一人は、近くの町に訪れた。

「意外に広いな」

「そうですね～」

その時に橋を渡る一団がいた。

「あれは……」

一番偉そうな人が何かをしゃべっているのが聞こえた。

「くそつ、逃げられた！！せつかく魔王の娘を捕まえられるチャンスだつたのに…しかも、追撃したら木が降つて来て、退却せざる負えない状況になつたし……くそつたれ！…！」

「なんか…怖いですね」

「あれは、俺たちを追撃した部隊だな、それに見事に俺の作戦は成
功したな！」

「えつ！何のですか？？」

「お前に木を、後ろに飛ばしぐれって言つただろ。」

「ああ……確かに」

エリスが納得した顔になつた。

「それでの被害だな、たぶん。」

「へえ～意外に考えてたんですね

「意外にとはなんだ意外にとは…」

拳骨をくらわす。

「いったーい！ ほめたんですよ私！？」

「何かむかついたからな」

「理不尽な！？」

そうして、戯れているときに、突然空から誰かが来た。
甲冑で身にまとつた女性だ。

「何だあれば？」

「あれば…まさか！！」

エリスがビビッ ている。

「おい、エリスどうしたんだ？？」

「あの人たちが神族です。早く逃げましょう。」

エリスは、俺たちを捕まえに来たかと思つて いるんだ。

「なるほど、あいつらが…」

神族は、背中に羽を生やしていた。

「ちょっと待て、どうやら俺たちじゃなによつだぞ。」

「えつ…」

よく見ると、人族の隊長に向かつていた。

そしてその隊長が慌てて、

「何でございましょうか？ フレイヤ様」

「ヒリス、フレイヤって誰だ！？」

「フレイヤは、神族の一番槍と言われている人です。」

「なるほど、強いのか……」

「なんじは、人身売買や売春行為で多額のお金稼いでいたとは本当の事か？？」

フレイヤが、人族の隊長に問いかけていた。

そうすると、隊長は、青ざめた。

「い、いえ……何のことをおっしゃっているんですか？」

「そなたが、不正な行為で金を稼いでいるのか。と聞いている。」

「そんな事する筈が無いじゃないですか！？」

フレイヤが剣を構えた。

隊長が後ろに下がつて行つたが、橋の手すりにぶつかつた。

「オーディン様より、そなたが嘘をつかなければ軽い罰でよいが、嘘をついた場合殺せと言われている。」

「ひつ！…ひつ！…何で…！」

「お前に最後のチャンスを与えたのだが、残念だ。」

「つ…！」

次の瞬間。

隊長の頭が吹っ飛んで、体は川へと落ちて行った。

「肅正完了。そなたたち行つてもよいぞ」

後ろに待つて行つた兵たちは、みな走つてこの場から去つて行つた。

「エリス……神族はあんな感じなのか!?」

「はい、そうです。人族、魔族関係なしに、肅正していっています。」

「神族つておつかないな……」

タクミ自身、その光景を見ているときにつばを飲み込んでいたのに気が付いていない。

フレイヤがこちらを見た。

俺は、一歩も動けずに固まつてしまつた。

そして、目線を上にあげて飛んで行つた。

「俺たちを見逃したのかな?」

「はい……たぶん……」

「「ひどなところはないで、さつわと行け」」

「そうですね」

二人は真つ赤な夕日が見える中、宿屋を探しに街の中へ駆け足で入つて行つた。

第五話 「……勇者が魔剣を持つかー？普通ー！」

「」は、ヴァルハラ宮殿。

神族の唯一の地上拠点。

そこには、大きな翼をもつた女性と、甲冑で身にまとった女性がいた。

「オーディン様ただいま帰還しました。」

甲冑で身にまとった女性がひざまずき、そう言った。

「よくやりましたね。フレイヤ」

大きな翼をもつた女性が返事をした。

「は、はい。もつたいなきお言葉……一つ報告しなければならないことがあります。先ほど訪れた町で魔法の娘ともう一人不思議な男がいました。命令になかったために放置しました。」

「魔王の娘ともう一人の男は、別の世界の勇者です。」
下に向いていた顔をあげて

「勇者！？すぐに殺した方がいいのでは？」

「大丈夫です。すでに対策を講じてあります。もうすぐ現れるでしょう」

「」

一人の少女が歩いてきた。

「まったく、バカ兄貴がいなくなつたと思えば、なんでか私までこんな変なところにいるのよ」

「来ましたか、ようこそ、ヴァルハラ宮殿へ」

初対面の人ケンカ腰に

「あんた誰？」

「私の名前は、オーディン。改めて歓迎します。両羽

じょうは

千夏さん。

そして、両羽 巧の妹さん

そんなことを気にしていいかの様子で言った。

「何で私の名前と家のバカ兄貴の名前を！？」

突然兄の名前が出てきた少女は驚いた。

ヴァルハラ宮殿でどうなっているのか知らない一人は、宿屋を見つけて泊ることにした。

宿屋の中は、ぼろくてランプが一つしかない暗い場所。「今の状況じゃまずいな……」

椅子に座つてタクミはうなつている。

「だから、行つてるじゃないですか！無理だつて！」

エリスもこことばかしに抗議する

エリスの言葉を無視し

「まあ、それはおいおい考えるとして、魔法軍の歴史について教えてくれ。」

エリスは突然聞かれたので何事かと思っている。

「急にどうしたんですか」

「いや、何で負けたのかと思つて。」

「それは・・・」

物思いにふけりながら語り始める。

私は昔を思い出す。

私たち魔王軍はお父様の魔剣と采配をもつて連戦連勝をしていきま

した。

このまま人族に勝つかと思われたのですが、そこで現れたのが神族です。

戦っていると突然空が光り翼を持つ人達が下りてきました。

そして、私たちの軍のみを攻撃してきました。

その時は、何とか逃げ偽る事が出来ました。

そして、たびたび来る神族を撃退はしていましたが、被害が多く。

お父様は、神族、人族と和平を結ぶことにしたのです。

そして神族はそれを承諾して、この戦争は終わりを迎えたように思えたのですが。

その和平調印の場で、神族の主のオーティンがお父様を剣で後ろから刺したのです。

その後、すぐ戦闘になりお父様は何とか生きている状況でした。

そんな時私に、

「後の事は、お前に任せる。この魔族を栄えさせるのも滅ばすのもお前の好きにしていい」

と言つてくれました。

そして重臣たちに言葉を残してから息をしなくなり死にました。

その後魔王軍は、連敗の連敗を重ねて自然に崩壊しました。

生き残った少數の兵と共に私たちは逃げて、最後の希望を勇者召喚

にかけたのです。

「そこから、タクミさんと出合つて今といたるわけです。」

「なるほどなーこの話を聞くと神族が悪いみたいだな。」

タクミの言葉に反応してエリスが興奮気味に

「そうです!! 私の…私のお父様を殺して…」

「わかつたから落ち着けつて」

エリスは、はつとなる。

「すい…すいません。タクミさん

「事情はわかつたから。」

「それで……次に行きたいところが出来ました。」

エリスは突然、決意をした顔になる。

「行きたいところ?」

「今のは思い出したのですが、ここから西にある森に、お父様の使っていた。魔剣があるんです。それを取りに行こうかと思います。」

「

「魔剣!?」

「そうです。それをタクミさんが使えばこの状況を覆せれると思うんです。」

「俺が魔剣!?」

「勇者なので魔法などの素質があると思います。」

エリスの一つ一つの言葉には、迫力があった。

「……勇者が魔剣を持つか!?! 普通!?!」

「でも、これしかないんです。お願いします。タクミさん……。」

「わかつたから」

俺は相変わらず、女の子のお願いには弱いらしく。
だって男だもんしかたない。しかたないよね……うん。

「よし、明日には出発したいから今日はもう寝よつぜ」

「はい」

そして夜が明けた。

「それじゃあ、全軍に伝えてくれ日指すは魔剣が眠る場所だ……！」
魔王軍一同、魔剣が眠る場所へと移動を開始したのであった。

「本当に勇者が魔剣を持つていいのか……？」

第六話 「お前にみんなが付いて来てるだろー!？」

魔王軍総勢800人は、一路魔剣が眠る森へと進路を取っていた。

エリスとタクミは、徒步で移動している。

「なあ、エリス、馬はないのか？馬は～？」

まだ歩き始めて2・3時間しかたっていないのだがタクミは、すでに疲れた様子を見せ始めた。

「まだ、歩き始めたばかりじゃないですか！？」

エリスは、疲れなど一つも見せずに歩いている。

「ちかれた～～」

「まったく、それでも男なんですか」

余裕満々な顔をして言つ。

「そんない俺は、元いた世界では、アウトドアのひきこもりで町では通っていたんだから！」

「アウトドアで引きこもりっておかしくないですかーー？」

エリスがもつともらしことを言つた。

感慨深い顔をして

「外に出るのは好きなんだが、趣味がなくて引きこもりでばかりだつたからな」

「引きこもつて何してたんですか？」

「本ばかり読んでたかな」

「ちょっとびっくりして

「本ですかーー？今のタクミちゃんには一番似合わないですねーー」

言つてから、エリスは殴られるかと思つて頭をガードしたが殴つてこなかつた。

「そうかもな…」

予想外の言葉にエリスは驚いた。

確かに俺は変わったのかもな…ここに来て

タクミは、今まで親父たちに囲まれていたせいか普通じや考えられない体験を何度もしてきた。

その中で本を読む行為は、心が静まつたために好んで本を読みふけていた。

そんな生活を送っていた父タミからしてみれば、全然みたいな生活もありなのかなと思う心があるのかも知れない。

「タクニellan...」

エリスは気まずそうな顔を作る。

「何暗い顔になつてゐるんだよ！お前は笑つてゐるかアホなことして
ればいいんだよ」

「アホなことつてなんですか！アホなことつて！」

卷之三

「もう…タクミさんは」
エリスは微笑んだ。

「何だよ。」

ちょっと照れたタクミであつた。

その後小休憩を取りつつ進軍していく、あと四分の一まで差し掛かつたところで空がオレンジ色に染まり、太陽が沈みかけたために野営することになった。

「食料とかは、大丈夫なんだろ？」

「はい、あと2、3週間分はあります。」

「しかし、なんでそんなに準備がいいんだ？」

タクミは、敗走してきた魔王軍にしては、武器や食料が多くある。

「それはですね…魔王上に会つた秘宝やお宝をすべて売つたからです。」

苦笑いをする。

「それは、凄いな！お前もなかなかやるなー」

タクミがエリスの事をほめている。

「…そんなことないですよ…ただみんなの事を考えてですね…そうしたほうがいいかなーなんて思つただけなんですか？」
もじもじしながら返答をした。

「何照れてるんだ？俺はそこまでしてお金が欲しかったのに驚いているだけだぞ」

タクミは、ほめたことが照れ臭かつたのでごまかした。

「そんなひどいです。お金なんていりませんよ！」

「じゃあ、俺にくれよ」

ポケットから巾着みたいなものを出してきて

「今これだけしか…」

チャリン出てきたのは、銀貨3枚だった。

「まじか？」

「はい…」

タクミが銀貨3枚をこれでもかつていうぐらご眺めた。

「本当にこれだけか？」

もつ一回確認する意味も込めて聞いてみる。

「はい… そうです。」

「これからどうするんだ？」

「どうしよう～」

「質問を質問で返すな…！」

タクミは内心呆れはしたが、エリスはぬけついぬといふがあるなど
思った。

「これからいつ魔剣を取つてから考えましょ～…ね！」

「まかすように早口で最後の『ね』をやけに強調させた。
「はあ～お前も人のことが言えな～くらいいい加減だな
「そんなことないですよ～」

やけになつたように反論してくる。

「いやいや、そんなことあるだろ～。自覚してないだけだろ
「そんなことないです。」

二人がいがみ合つてゐるところに

「～」飯出来ましたよ……」

おそるおそる、骨人間が話しかけてくる。

「うん？ 誰だ～」いつ？

「私は、スケルトンの骨子といいます。」

「そのまんまだな」

見た目通りの名前だ。

「わかりました。すぐ行きますね」

骨子は、どこかに行つてしまつた。

「エリス、さつきの事は水に流そつか

「やつですね。流しちゃいましょう」
よつやく一人の意見が一致した。

食事中

「いひじつ感じもいいな」

周りでは騒いでいてとても楽しい感じになつていて。

「そうですね。私もそう思います。」

エリスも周りを見ながらつぶやく。

「私は、こんなみんなの笑顔が見たくて戦っているのかな～って思う時もあります。」

「そつか……軍を率いる者の心構えとしては十分だな

タクミは、にやつと笑う。

「何で笑うんですか？」

「これから、勝てる気がしたからだ。」

「勝てる気が？」

エリスが首をかしげる。

「お前にみんなが付いて来てるだろ！？」

「でも……私なんて軍を率いる資格なんてないですよ……」

落ち込み気味な発言をしたエリスに向かつてタクミは、

「エリスが軍を引っ張つていけ、そして俺がお前の頭となつて引っ張つてやるから心配するな。」

「エリスが軍を引っ張つていけ、そして俺がお前の頭となつて引っ張つてやるから心配するな。」

タクミがやさしい笑みを見せながらエリスに言つたため。

エリスは、呆然としつつ頬が少し赤くなる

「何ですか？急にそんなこと言ひだして」

「エリスにこれだけは言ひたかったからな」

「そうですか」

そうして、月の下で一人は、仲をより仲良くなり、魔王軍は踊つて舞つた。

朝日が見えるところに・・・・

「大変だ～大変だ～人族の部隊が来た～」

偵察に出ていたゴブリンが慌てて伝達してきた。

「ふわあ～～～寝み～」

あぐびを殺しながら髪をぼさぼさとかいでいる。

「そんなこと言わずに、どうするんですか？」

自信満々な顔で

「昨日行つただろつ、俺がエリスの頭になつて引っ張つてやるつて

「やつですけど……」

タクミは立ち上がり

「よし、人族を迎え撃つぞ！！」

魔族と人族の戦いが始まろうとしている。

第七話 「全軍停止…！」のまま陣形を整えひー！」

タクミ達は、敵の兵力を探るため最初に偵察を出した。

そして1・2時間したら偵察に出したゴブリンが返ってくる。

「兵力はどれくらいだ？」

「1000後半ぐらいです」

あいまだが、見ただけで数を数えるのは難しいから仕方ない。

「倍ですか……」

エリスは、タクミの方を見る。

「倍だな！よし、今から作戦を言つゞぞ」

タクミは、兵力など関係ないかのような雰囲気を出している。

「大丈夫なんですか？数も不利ですし、地形も左右が山に囲まれて

いて、一本道みたいなところなんですから」

不安の要素がたくさんあつたためエリスは、大丈夫なのか心配して

いる。

「ああまかせとけ！」

タクミは、魔剣の事しか想えていなかつた。眼中になかつたのだ。

敵の事など……

場所が変わつて、人族の軍隊。

「申し上げます。敵は、前方に陣を張つておひ、横長い陣を引いておひります。数は、不明です。」

若い偵察兵が指揮官の所まで来る。

「なんだと！ どうしてもつと、詳しく調べなかつた。それでは、兵力もわからんではないか！」

戦いをはじてているというのに、右手にビールのジョッキをもち、イスに深くもたれかかつている人物がこの部隊の指揮官が言つた。

「くそつ！ これでは、作戦がたてれんではないか！」

机にジョッキを思いつきり置いた。

その音に驚いた若者は、そそくさと出て行つた。

そして、横に控えていたいかにもエリートの士官学校を出ましたみたいな人が指揮官の前にきた。

実際そうなのだが。

「魔族におそるに足りません。ここは兵力で押していきましょう。」

「まあ、そうなんだが」

指揮官は、経験上では危ないと思つたがこの参謀は有能なことから士官学校から派遣されてきたためある程度は言つことを聞かなければならぬ。

「ふむ、お前に任せてみよ」

「ははつ、ありがとうございます。それでは、横一列に並んでいるので三つに部隊を分けてそれぞれぶつけていきたいと思います。指揮官の目が少し大きくなる。

「部隊を三つに分けるのか……まあいいだろ。編成もお前に任せる」

「わかりました。お任せください。」

そうして、若い参謀は出て行つた。

「グスバルね……あいつは使えるのだろうか？」

グスバルと呼ばれる若い士官は、着々と準備を開始した。

そして、僅過ぎのころグスバルは、部隊を三つに分けてそれぞれ、歩兵同士の戦闘が起きるかと思つたが、敵は逃げて行つた。

「ふんっ、やはり魔族なんてただのクズだな！」

そして、顔のおでこあたりに手を置き笑つている。しかし彼自身きづいていなかつた。

これがすべて読まれていることを……

山の中に、大勢の兵力と一人の人物が潜んでいた。

「やつぱり、こう来たか」

タクミは、笑つているまるで獣を追いこんでいるような感じで

「タクミさんどうして、三つぐらいに部隊を分けるなんてわかつたんですか？」

ちよつと疑問を持ったのか小声で聞いている。

「それは、横一列に並んでいるときに一番気を付けないといけないのが、横からの挾撃だ。そしてそれを効果的に防ぐために、分散させてのだろうがあの部隊の指揮官か参謀の腕はそこで終わりだ。本質を分かつていない。」

「本質ですか？」

頭の上にはてなマークが浮かんでいる。

「ああ、部隊を分けるって事は兵力を分割して数が少なくなつてい

る。だから隠れている部隊でも十分に対応が出来る。」
「う時に便利だよなスケルトンって」

タクミは、スケルトンがただのゴミだという考え方を改めた。

ただしエリスからするといいくら死なないからと言つても捨て駒みたいに扱うことを少しためらつていて。

「まだ…なんですか？」

スケルトンの人たちをかわいそうに思つたエリスは急かすようにタクミに話しかける。

「もうちょっとだ……」

そして、山の中でひつそりと息を静めていることを知らないグスバルは、勝てると確信したために慢心している。

「そのまま押し切つて！……！」

そのまま勝てるかのように思えた戦場。

しかし、グスバルの見た光景は、悪夢だつた。

三つの部隊のうち、左右の部隊が魔族によつて攻撃されていたのだ。

「魔族にあれだけの兵力があつたのか！？」

確かに目の前の光景は信じられないことが多いだらう。

「申し上げます。」

傷だらけの兵がこちらに方向を持つてきた。

「中央の部隊からですが、敵主力だと思われていた部隊は、少數しかいません！！」

その兵士が悲痛な叫びが戦場に流れる。

「そ、うか……」

グスバルは、敵の戦術に見事にはまつたことに気付く。

そして 懇然とする

少し時は戻つて

「あと少しだ。落ち着け~」

タクミはエリスの肩に手を置きながら言へ。

「落ち着いてます。」

先ほどの雰囲気とは変化していた

そして、敵部隊が真横に来たところで

「全軍！突擊！！」

雄叫びが鳴り響き魔王軍は、敵部隊に向かつて攻撃を開始した。

そしたら、その勢いにのまれて押されて中央に人族の軍が集まり、だんだんと包囲される形が出来てきた。

三方を囲んで、後ろだけ開けている三日月型の陣形が完成した。

「なんでも、後ろを開けておくんですか？」

エリス達は、全体がある程度見える丘に来ていた。

「それは、困むと敵が追い詰められたと自覚して最後の奮戦をしてこちらの被害が多くなつちまう。でも、一か所だけ開けておくとそこに逃げると思つてどんどん逃げてくれるから、その後ろから攻撃したほうがこちらの被害が減るからこの陣形なんだ。」

「なるほど」

エリスは、納得した顔を見せた時にタクミの言つた通りに敵は逃げ始めてこちらが追う形となつた。

敵を散々追い回して途中で

「全軍停止……」のまま陣形を整えろ――

タクミの言葉で敵を追つのをやめ始める。

「こんなもんでいいだろ？。」

タクミは、魔王軍の強さを確認できた意味でも今回の戦いは有意義だった。

「そうですね！」

エリスは、タクミの作戦がしっかりとあることを知つて内心驚いている。

いつもボケツとして何にもできそつになつようにしているのに今のタクミは、単純にいくつも作戦を考えてしまつと実行しているところがす”こと思った。

「いのまま、一気に進もう。魔剣の眠る森までー。」

タクニの言葉で全軍は動き始めた。

第八話 「おひおい、言わと」ひちやない……

グスバルは、逃げて行つている部隊を見て何も言えなかつた。

「グスバル、お前の慢心が招いた敗北だな」
いつの間にか指揮官の男が来ていた。

「すいません。ゴルバ殿」

頭を下げて誤つてゐるがその顔はくやしさで唇をかんでいる。

「ゴルバ、というのは、今回の指揮官の名前で勇猛果敢だが上官の命令
意を聞かないため部隊長どまりの男である。

「次は、俺が指揮をする」

「次？」

「今回の戦いは惨敗で終わつたにも関わらず、ゴルバは次の機会を狙つ
ていた。

「次ですか……」

「ああ、もうすぐで増援の部隊が1000人、来ることになつてい
る。それと今の部隊を合わせて再度叩くぞ……」

ゴルバは自信満々で魔王軍の事を狙いつつ退却するのであつた。

一方魔王軍は、そのまま魔剣の眠る森へと進んでいた。

「魔剣つてどんなものなんだ？」

二人が並んで歩いているときにタクミが聞く。

「お父様が持ついたものです。名前はダーインスレイブと言います。」

「ダーインスレイブ……」

「名前からして魔剣っぽくタクミ自身持てるのか自信がなくなっている。」

「これは、お父様から聞いただけなんですが、なんでも戦場を一瞬でか減る事が出来るらしいです。実際お父様の攻撃で戦場が変わるので何回も見てきましたから」

「戦場が一瞬で……」

タクミは、その魔剣を手に入れれば魔王軍をかなりいい所まで立て直せると確信した。

「それじゃあ、速く取りにいかないとな」

「もう、待ってくださいよ～タクミさん！」

タクミの歩幅が大きくなり駆け足気味で歩いていくにエリスは後ろからついて行く。

夕方あたりに差し掛かり野営することになった。

本当なら今日中に着く予定だったが戦闘をしたために一回休息を取る必要があったのだ。

「あと、少しだな」

タクミは、もう少しで魔剣の所に行けるといつ高揚感に浸っていた。

「もう、子供見たいですよ。タクミさん」

エリスは、そんなタクミが面白くて笑う。

「タクミさん、少し頭を冷やしに行つてきた方がいいですよ」

「… そうかもな」

タクミ自身とても興奮していることに気が付いたので

すこし、雑木林の中へ行く。

「しかし、本当にありえないことだらけだよな…魔剣とか魔法とかRPGだけかと思ってたのにな」

そんな風に感慨にふけていると

「助けてください…!!」

急に女人のかわいらしい叫びが聞こえた。

「うん…これ、前に聞いたことがあるよつな…」
少し考えてみてもわからなかつたためいつて見ることに、
そして、腰にかかっている剣の鞘の部分を持ちながら声のする方へ
向かつていつた。

「助けてください…!!

月明かりが木によつて防がれており少薄暗い林の中にその人物がいた。

「お前は、骨子か…！」

前に、飯の時に呼びかけてくれたスケルトンの骨子がいた。

「…で…何で頭だけなんだ。」

骨子は、頭蓋骨の頭だけこちりを見ていた。

「私が転んで体がバラバラになっちゃったんです。」「バラバラ……」

周りを見てみると、確かに骨らしきものが散らばっている。「タクミさん、直してください……」

頭蓋骨の口の部分だけが動いていた。

「これを、直すのか……」

周囲には、三ヶタ行くのではないかと思えるぐらいいの骨が散らばっている。

「お願いしますよ~~~~~」

「いや……俺には無理だ。ありがとうな骨ナ。」¹飯のとせに読んでくれて

タクミが後ろを向いて帰ろうとして

「ちょっと待ってくださいタクミさんひどくあります。」

骨子の叫んでいる。

「私なんて戦場でも体に触れるだけでバラバラになつてその後に体中を踏まれるだけな存在ですけど助けてくださいよ~~~~~」

「それは何でいうか……残念だな」

タクミは、振り返つて言う。

「残念でもいいですから助けてくださいよ~~~~~」

骨子の口がカチカチ言つてこる。

「ああ、わかったよ！」

そつして、タクミは、骨子の修理を開始した。

「えーと、ここは、これでいいのか？」

「違いますよ~なんで手と足が同じとこりへりへりつてこるんです

か
く

その後ちょっと直していく

「ふう――終わった。」

「いや、骨子の体が戻ったのだ。
いつたい何時間かかったんだよ……」

「タク//切る、あつがさうい//ザニます。それでねーでー

骨子は走つて去つていいく。

一
おへ
傳子御ひへるべく

「キヤ！」

骨が散らばる音がした。

「お二様、言わんといつたらない」

田の前には、骨子の骨が散らばっている。

「タク//さ――――ん――――！」

「わかつたよ直してやるよ」

その後アリオと同じ通りに直していく

「さすがに一回やったことがあるだけに早く終わつたぜー」

「ありがとう」
骨子がお礼を言つ。

「ああ、ゆつくり帰れよ」

そのまま、骨子とは別行動をとつた。

「大丈夫かなあいつ……」

タクミは、骨子のことを少しだけ心配した。
でも、

「スケルトンの組み立てに慣れても得ないな……」
ちょっと損したようなよくわからない気持ちになつた。

戻つていくと

「タクミさん……どこ行つてたんですか！？」

エリスは、心配そうな顔をした。

「ああちよつとな……」

エリスに心配させることに申し訳なさを感じるが骨子の事はあまり話したくなかった。

なんせ二つちに来て一番疲れたことだからだ。

「やうですか……」

エリスは、小さくうなづいた。

夜が更けて行く。

第九話 「…つてお前が俺を呼ぶ魔法を教えたのはー!？」

ヴァルハラ宮殿では、一日休んだ千夏がオーディンに会いに来ていた。

「おはよー。千夏さん。」

オーディンは、前回会った時とほとんど同じ位置にいた。

「それで、決めてくれましたか？」

まっすぐとした視線で聞いてきたため、

千夏は

「はい、決めました。私は、バカ兄貴を連れ戻す！」
こぶしを握りしめた。

「わかりました。しかとその覚悟を受け取りました。それでは貴方には、人族の部隊を率いて魔王軍と戦ってください。」

「私が指揮をとるんですか？」

千夏は今まで一度も指揮なんてとったことがなかつたので心配だつた。

「大丈夫ですよ。あなたにならできます」

「つ！」

千夏は、震えた。内心をオーディンに悟られたからだ。

そして、体の中にもとて冷たい何かが残つた。

「あなたに渡したいものがあります。」

そうして、オーディンが後ろから持ち上げたのは、長さが2メートルぐらいあるでかい大剣だつた。

千夏は、オーディンがもともと渡すために後ろにおいてあつたので私の心を読まれたとかそんなことを考えたが、目の前の大剣に心を

奪われた。

「……」

何も言えないほど何かすごいものを感じ取った。

「これは、聖剣エクスカリバーです。」

「……エクスカリバー……」

「太古より、邪なるものを倒してきた聖剣です。あなたにはこれを使って魔王を倒し兄を取り戻してください。さあ、こちらに……」

そして、千夏はオーディンからエクスカリバーを受け取る。

「軽い……」

持つてみて重いと予想したのだが以外にも軽かつた。

「それは、あなたに聖剣がなじんでいるからです。」

「なじむ？」

首をかしげる

「エクスカリバーがあなたを認めたのです。使うことにどんどん強く使いやすくなるでしょう」

「そうですか……」

「それでは、あなたはブリュンヒルドを付けてあげます。」

そうして現れたのが金髪のショートヘアの女性だった。

「オーディン様。何なりとお申し付けを」

ブリュンヒルドはひざまずいている。

千夏はその様子を立つたまま眺めている。

「そなたには、そこにいる千夏さんを助けてもらいたいのです。」

ブリュンヒルドは、ひれめずいたまま千夏の方を見た。

「かしこまりました。」

「それでは、千夏さん、ブリュンヒルドよろしく頼みますよ
オーディンはその言葉を残すとそのまま何も言わなくなつた。」

そして、二人は出て行つた。

妹に狙われているとしらないタクミは、魔剣の眠る森に着いた。

「はあ――やつと着いた――……つてここで会つてゐるのか！？」
タクミの田の前に広がつてゐるのは、昼にもかかわらず薄暗い森だ
つた。

「はい、せつです。」

エリスはくくと首をふる。

「まじかよ……もつとお城とかとてでもかいお墓にありますとかそ
ういう設定はないのかよ！――」

「タクミさんは、いつたい何に期待してゐんですか？そんなのすぐ
に見つかって取られちやうじやないですか！」

「ああ、そうかよ」

タクミは頃垂れる。

「もうそろそろ來ると思います。」

エリスは、誰かを待つてゐるかのよつなそぶりを見せる。

「誰がだ？」

「ここを守つてゐる部隊です。」

「」

「ここに部隊がいるのか兵力はどれくらいだ？」

タクミにとつて兵力を増えるのは願つてもないチャンスだった。

「確かに1000人ぐらいいたような」

エリスは指を額に添えて考えて言った。

「1000人ってどこでいるんだ？」

見た感じ薄気味悪いただの森しかなかつたので不思議に思つていると

「エリス様おひしゃしゅづびでこます。」

そうして現れたのが魔法使いみたいな服を着ていかにも怪しい宝石をついた杖を持っているよほよほのおじさんが出てきた。

「ジョンじい！久しぶりです。」

そうして、エリスとジョンじいは、ばぐをする。

「だれだ？こいつ？？」

タクミが不思議そうな顔をする。

「この人は、リッチのジョンじいです。お父様に古くからつかえていて。私の魔法の先生です。」

「リッチっていうのは？？」

リッチというのがわからなかつたタクミは聞いた。

「魔族の中で一番魔法が使える人たちのことを言います」

「なるほど」

紹介されてジョンじいがタクミの前に来る。

「ふおふおふおーーエリス様は、召喚の儀式に成功したのですね」

「はい。」

「…つてお前が俺を呼ぶ魔法を教えたのは！？」

ジョンじいを指でさしてタクミは驚く。

「そうです。ジョンじいが起死回生の魔法として召喚の魔法を教えてくれました。」

エリスがそういうと

「お前のおかげでこいつは巻き込まれたんだぞ……。」

タクミは、叫んだのだがジョンじいは、無視する。

「わしの魔法間違えたかの～」

手を顎においてさすりながら言った。

「何だとこのじじい！俺を読んでおきながら……。」

タクミは、食つて掛かる。

「一人とも落ち着いて、タクミさんの指揮のおかげで一回も救われています。」

「それならよいのじや、それでエリス様要件は、魔剣を手に入れる
ことでいいのですか？」

さも、先の話はどうでもいいかのようにエリスと話す。

「はい。」

エリスははつきりと頷く。

「この男に適性があるのか楽しみじゃのうー」

不気味な笑いを浮かべている。

「それじゃあ、行きましょうタクミさん」

エリスがタクミの袖を引っ張る。

「ああ……」

タクミは、ジョンじいの言つてることに疑問を持ちながらエリス
共に深い森の中に入つて行つた。

そして、小さな穴があった。

「ここです。」

エリスが指をさしている

「ここか……」

中の様子は良く分からぬが不気味なオーラを感じる。

「それでは、タクミさんこれを持つて行ってください」

そうしてエリスは、タクミに灯のともつたろうそくを一本を渡す。

「これから俺一人か？？」

「そうです。頑張ってください」

そうしてタクミは、穴の中に入つて行く。

「けつこうつな。広さがあるな」

周りを見渡すと人が一人ぐらい余裕でとおれる道があった。

「あそこか……」

急にひらけた場所に出て目の前に周りに術式みたいなものが書かれているところで剣が浮いていた。

「これが、ダーインスレイブ……俺の物にしてやるよー。」

タクミは、手を触れた。

そうすると突然闇に包まれた。

「なんだ？」

「お前は、誰だ？」

声が聞こえた。うす気味悪い声が・・・・・

「私は魔王だ。」

いきなり魔王に会つたのだった。

第九話 「……つてお前が俺を呼ぶ魔法を教えたのはー!?」（後書き）

感想や評価などを待っています。

第十話 「まさか……魔王！？」

「私は魔王だ。」

えつ！

声は聞こえるのだが姿がなかつたため内心で焦つていたがなるべく顔に出さないように心掛けた。

「それでお前が魔王か……」

手は汗をたきながら置いた

い方二十一
和方廣二十九

「それなら要件が早く済みそうだ。とつとと魔剣をだせ!」

まあ、そう焦るな少し話しどう

「何のだ？」

「エリスは、元気にしてるか？」？？？」

弱弱しい声で言われたためタケミは、少し引く。

「…ああ、元気だぞ。魔王軍をしつかりと引っ張つて行つていい。」

— そうかそうか、さすがは私の娘だな！」

なんか声が明るくなっている魔王を見てタケニは確信した。

「お前、親バカだろ……」

魔王がちょっと焦った声で

「何バカなことを言つていいんだ。ただ……娘を可愛いと思つて当然だろ……なあーお前もそつ思つだろーー」

「まあ、確かにかわいいな……」

「可愛い……だと……」

少し変な間が流れた。

「お前！私の娘に何かしたな！！あまりにも可愛いからつてやつてもいいことと悪いことがあるぞーー今すぐこお前を消してやる」

「えつ……ちよつと、Hリスのお父さん……こきなり消すつてないんじやないですか……」

いきなり怒られたタクミは、焦りつつ逃げる場所がないためどうじよもできなかつた。

「あ、お前なんかにお父さんと呼ばれたくないわーー汚らわしいーー」

「ひつちだつて、お前がエリスを生んだことが不思議だよーー」

タクミは何かむかついたために反抗している。

タクミ自身泣されると言われて黙つてはいられないのだらう。

「何ーわしを愚弄するどいりか娘の悪口を言つのかお前はーー」

どいにでもいる親バカなお父さんみたいたつた。

魔王の威厳も何もそこにはなかつた。

「エリスがあの性格なのも頷けるな……こんな父親を持つたらな……

タクミはため息を一つ。

「ちよつと甘やかしきただけだ……」

ちよつと言い訳じみた感じに魔王がつぶやく。

「ちよつとじやないだろ絶対に！教育の仕方が根本から間違っているぞーー！」

タクミはなんか…立場逆転してないかなと心の中で思った。

「わしだって、心配で心配でこいつしてエリスが魔剣を取りに来るのを待つていてサプライズにしようかと思つておつたのにお前なんかむさくるしに男が来るとは思わなかつたわい。」

「サプライズって…死んでないのか？？」

「そうすると紫色の塊が出てくる。」

「体は滅びても魂はちゃんとあるからな」

タクミは触れよつとしたが触る事が出来ず通り過ぎて行つた。

「なるほど……で、お前はこの状況をどうとかじよつとしないのか

…

タクミは、今までとは違つ眞面目な顔をしていつたため、魔王はそれに答えた。

「わしは、死んだのだ。今は魂でしかない。だから、すべてをエリスに任せた。」

「エリスが大変な目にあつているのを知つててか！…」

「ちよつと興奮氣味で言つたため語氣が強くなる。」

「ああ、わしは全てをエリスに託したのだ。逆に信頼におけるだけの器になつたと思つたからだ」

タクミは、確かに今のエリスは軍を率いていけるだけの器はある。

「エリスは、苦しくても頑張つてたんだぞ！それを見ているだけか

「俺はエリスを助ける。だからとひとつ魔剣をよこせ……！」

タクミは、叫んだ魔王に向かつてだけではなく誰かに向かつて叫んだ……。

「わかった。お前の覚悟は、しかと聞いた。それではお前に素質があるか確かめる必要がある。」

魔王の魂らしい後ろに一本の剣が出てくる。大きさは、1メートル50センチぐらいだらつか、細いスリムな剣が出てきた。

「ただし、素質がなかつたらお前の命を食べてしまつ剣だ。この剣に認められたものだけが扱える事が出来る。お前にそのことを分かつているか？」

「そんな事、百も承知だ。俺は、エリスを助けるためにこの剣を取つてやる。」

タクミは、ここに来る前はただ本を読んだりして何も面白くない時間を過ごしていた。

それこそ太陽のように時間通り上がつて時間通りに沈んでいくそんな生活を送っていた。

でも、エリスがこつちの世界に呼んでから一変した。

まだ数日しかたつていないがそれでもいろいろなことが楽しめたことが何よりうれしかった。

楽しかった。

だからもととエリスと一緒に何かをしていこうと思つた。
これからもつと大きい事が出来ると思ったから・・・

「覚悟してやるよ」

そうして、魔剣を手に取ると、周りに黒い何かが渦巻いた。

しかし、怖いなんて思わなかつた何で少し暖かく感じた。

「これは……死ぬのかな…」

そう感じたのだが渦は収まつていき自分の手には剣がしつかりとあつた。

「ほお～～～ダーインスレイブが認めたかお前を……」

「手に入れたのか俺がこの魔剣を…」

剣を持つてみると意外に軽く竹刀を持った時と同じ重さだった。

「お前は面白いな！これから楽しみだ」

景気よく笑つて いる魔王。

「何でだ？？」

「お前は、魔剣に認められたのだからな」
言つて いる意味が良く分からなかつた。

「これは、楽しみになつた！」

ケラケラと笑う魔王だつた。

「そんじゃあ、俺は戻る。じゃあな」
「どうやってだ？」

確かに周りは暗闇に包まれている。

「そんなのこいつやるんだ！」

ダーインスレイブを一振りしたら周りがパリンといつ音と共に先ほ
どいた洞窟へと戻ってきた。

タクミは、洞窟から出ると

「タクミさん！！」

倒木の上に座っていたエリスが「ちら」に走ってきた。

「大丈夫でしたか！？」

心配そうにして来たのでタクミはダーインスレイブを見せる。

「ほらな！」

「それは、ダーインスレイブ……タクミさん手に入れれたんですね
！！！」

「ああ！」

二人して、抱き合って喜んでいたのだが、

「ワーン……ガウウウ————！」

何やらイヌかオオカミの声が聞こえてきた。

後ろを見ると、

(わしのヒリスに何するんだ)

タクミの頭の中に言葉が響いた。

「 まさか…… 魔王！？」

タクミと一緒に元魔王の体長約一メートル後半のでかいオオカミが
出てきたのだ。

Rambie ウィーンから愛をはじめる…………（前編）

番外編です。

今日はハロウインなので、そのネタの過去編をひとつ書きました。

本編とは、少ししか関係ありません。

タクミは、13歳の時の夢を見ていた。

「兄さん！今日は、ハロウィーンだね！…」
まだ、小学6年生の千夏がこっちにくる。

両羽家では、大抵両親が不在なため俺がほとんど家事をしていた。

「ああ、そうだな。だから、今日はカボチャメインの食事にしてやる。」

その日がたまたま休日だったために俺は、一 日中かけて仕込みをしようと計画を練っていたのだ。

「樂しみだな～～～」

「お任せおけ」

俺は、そうして仕込みをするために材料を切ることにした。

「兄さん。今……朝だよ……お腹すいたよ～～～」

「ああ……忘れてた」

「兄さん時々そういうの抜けているからダメなんだよ。」

「「」ねん」「」ねん」

俺自身、何となく楽しみにしていた。

親父たちがケチなために、いつも口しか、豪華な料理を作れなかつたのだ。

時々思う。

中学一年生が考える事じゃないよな……

「兄ちゃん～まだ――――――」

「ああ、『じめん。』『じめん』

すぐ「元朝」はんを作った。

「「」いただきます」」

一人の声が家の中から聞こえる。

「どうだ！？」

今日は、ベーコンエッグを作つてみた。

「うさ。こつも通り！」

作った俺からしてみるといつも通りといつのが褒めているのかよくわからない。

「でも、お父さん達何してるんだ？」……

「ああ？ 今はどうしているんだっけ？」

「一人とも何でか知らないけど忙しい。

母さんは、映画の収録で忙しいのだろうが、親父が忙しいのは分からぬ。

ただ単に、一緒にいたいだけなのかもな……

「今は、確かヨーロッパのどっかにいるはずだよ」

「ヨーロッパか……」

「一人とも口ケ地になる場所にいろいろと言っているために、消息がつかみにくい。

「よし、気を取り直して夕飯作るか！」

「うそ、楽しみにしている」

妹の笑顔がまぶしくてやる気になつた。

- しかし、何で数年もしないうちに性格が変わったのだろうか……
- ・

今世紀最大の謎だ。

匂は、適当にカップラーメンを食べただけだ。

「うーん、チキンカレー味おいしいね！！」

「本当に……辛いだけなんだが、味が辛いっていうのも」

「これが、おいしいんだよ！」

「やうなのか」

妹との味覚の違いが分かった。

「チキンがカレーなんてダメだろ」

「兄さんつまらない…………」

『ぐわい』

カレーと辛れーをかけたのがつまらないと言われたのがショックだ。
渾身の出来だったのに。

食べ終わり。

また、作り始める。

そして、仕込みをしていたら。
あつという間に夕方になっていた。

「兄さん……本当にできるの？？」

「ああ大丈夫だ！！」

しつかりと、豪華な食事になると想つ。

『ピンポーン』

ドアホンの音が聞こえる。

「私出てくるね。」

千夏が走つて行き、ドアを開けると

「こんなにちば、ウルフ宅急便です。お荷物をお届けに参りました。

両羽 巧様で会つていますか」

「はい」

「おおらかサインを

……。

……。

「ありがとうございます。」

ドアが閉まる音が聞こえ、箱を持った千夏がこちこちに来た。

「兄さん。ねえことお母さんからだよ
「みだり」

「へえ～～珍しいな。せっぱりハロウィーンだからかな？」

正方形の中ぐらいの箱を持っている。

「」飯で来たから、食べたい。開けてみるか？」

「うん」

やつして、夕食が始まつた。

「わあ～～～おこしこわい。」

「どうだ。」

ちゅつと作りすぎた気がするが……いや、作りすぎだ。

これで当分、夕食を作らなくて済む。

その後、食べて食べて食べたが……会話は全くない。

「おこしかつた」

「おこしかつた」

「お粗末様です」

やつぱり、かなりの量が残ってしまった。

「それでは、開けてみよう。」

そうこうしたとどめに千夏が開け始めた。

「これは……ビーテオとカボチャだな」

開けると、カボチャの中にビーテオが入っていた。

「ハロウィーンと並べさせてだね。とにかくビーテオ見てみよ。」

「ああわかった。」

ビーテオテックの中にいれて再生ボタンを押す。

背景がレンガで作られた家などが写っている。
その前には、

「ああ、お母さんとお父さん……。」

母さんと親父が写っていた。

「わはつはは、元氣が、わが息子娘たちよ」

マッスルで、元氣120%のいつも通りの親父が[写]る。

「今、俺たちは、オーストリアにいる。」

オーストリアと[言]えば、音楽と芸術の都があるな。

「へえ～～～オーストリア《・》リアにいるんだ。」

「千夏……『ラ』はいらぬいぞ」

千夏が真っ赤になり。

「間違えは誰にだつてあるよ」

言い訳をする。

「He y! ! 巧に千夏。元氣にしてるーーー」

元氣で活発な声であこがりしてくるのは、母さんだ。

「それで、今私たちがいる場所わかる??」

「いや、オーストリアだろ!」

つい、ビデオレターに突っ込んでしまった。

「巧一、オーストリアだらつていつ突っ込みはつまらんぞ」

「えつ。俺の突っ込みが読まれた！…！」

「巧は、相変わらず。父さんには勝てないわね。正解を言つてあげて。」

「それはだな」

少し間を作つて。

「ハロー——ウイーンにいるべ——俺達は——」

「え……」

「これは、寒い。

「兄さんまさか……」

千夏も気づいたようだ。

「どうだ。父さん渾身のギャグは、ハロウイーンの日に“ハロー”『ウイーン』にいるぞ。がはつはは」

笑い声が響く。

「さすが、笑いのツボ押さえてる。クスクス」

母さんまで一緒に笑つていた。

「それでは、またーー！」

そうして、ビデオが終わつた。

「何がしたかつたんだ……二人とも……」

「さあ～??」

ていうか、親父と同じことをした俺は……

はずかしいーー！

両羽家のハロウイーンは、こうして幕を閉じた。

「タク//セ起きてください」……」

エリスの大声でタク//は起きた。

「エリスなんだ??」

「いや、だつて何か無氣力そうで死にかけた顔をしてたから

「確かに……」

夢を思い出す。

「それでどうしたんですか??」

「寒いハロウィーンを過ぐしたのや」

「何ですか??」

「気にしないでいい

懐かしく思い出したくない夢を見た。

Rambie ウィーンから愛をひらく…………（後書き）

今後も過去編があるかもしれないで期待しててください。

話の途中でこの話を急に持ってきてすいません。

第十一話「これから、新しく仲間になつたフエンリルだ。」

「まさか……魔王!…?」

タクミがオオカミを見てあの声が聞こえたために魔王だといふことがわかつたが、エリスにはどうやらあの頭に響く声は聞こえないらしい。

「タクミちゃんがいたんですか…?」のオオカミちゃん…」

エリスは、少し体が震えている。

そして、タクミの後ろに下がつて行つた。

（おおおーーーー！エリス！より一層可愛くなつてお母さんに似てきたな！）

またもや、タクミの頭の中に響く。

「魔王!…どうことだ！これは…?」

タクミが痺れを切らして大声で言つたのはいいのだが

「え！…魔王つてお父様なんですか！?」

エリスがすぐさま反応する。

（お前わしは魔王ではない！…ただの狼だ。それにエリスには私の正体を知られたくないから黙つてくれないか？？）

タクミは、そばに近づき耳元で話す。

「…何でだよ！?」

（理由はいいから、わしの名前はフエンリルだとでも言つておけー。）

「ああ、 もうわかったよ！」

「タクミもさぞびびったんですねか…？」

エリスが懐疑的な視線でこちらを見る。

「あはは、 いや、 忘れてたよ。 魔剣と一緒に仲間になつた。 魔狼のフーンリルだ。 」

タクミが堂々と嘘を言つ。

それに乗つたフーンリルは

「ワンワン」

尻尾を震わせている。

「まったく、 ワンワンって犬かよ。 まったく魔王の威儀もくそもないな。 」

小声で嘆ぐ。

「やうなんですか！ よろしくねフーンリル！ ！」

エリスの目を輝かせて、 フーンリルに向かつて走つて飛びつき抱きしめた。

「よく見たら可愛いかも～！」

「ワン！ ワン！ ワオオオーーーーーーーー！」

なんかフーンリルも喜んでいる。

「はあーーー。 本当に魔王なんかいじつ……」

親子のスキンシップなのだが・・・

とタクミは内心嘆ぐ。 勝手にやつててくれとタクミは思った。

「エリス。 今日、 ここで野営をするからみんなに伝えてくれ
「はい、 わかりました」

エリスは、 タクミの言葉を聞いてテクテクと駆け足で軍のみんなに

伝えに行つた。

タクミがフェンリルの方を見る。

「これは、どういうことだ？」

（そのままの意味だが）

やはり、頭の中に響く。

「この声は、俺にしか聞こえていなようだが何でだ？」

（それはだな：わしは、さつき言ったように肉体はないが魂は残つていた。それで今まで魔剣に縛られてたからな）

「縛られる？」

タクミは聞きなれない言葉に首をかしげる。

（魔剣といのは、意志がある。わしは、あまりにも魔剣に好かれてしまつて、死なせてくれんかつたは！－がはは）

オオカミ自体は、息が淡いのだがタクミの頭の中には笑い声が響いて少し不愉快に感じる。

「事情は、わかった。それで、お前もついてくるのか？？」

（もちろんだとも）

「そりかよ……どうせダメと言つてもついてくるのだろ！？」

（もちろん！－）

タクミは、ため息をつきながらフェンリルと一緒にエリスのもとへと歩いて行つた。

そしてエリスの前に行き。

「これから、新しく仲間になつたフェンリルだ。」

「ワンワン」

そういうて、フェンリルを紹介した。

一方の人族は……

「ゴルバ様、増援部隊が到着いたしました。」

「うむそうか。これで魔王軍を粉碎できるわー！…がつははー！」
机を叩きながら豪快に笑っている。

そして、その横に控えていたグスバルもかすかに笑っていた。
そうして、人族は魔族への再戦へと意気込むのであった。

「ブリュンヒルドだけ？こんなにも兵隊をくれるの？」

千夏は、陣織の中でブリュンヒルドに訪ねる。

「そうです。しかし、千夏様先ほど通りかかった部隊も魔王軍の所
へ向かっていたようでしたがよかつたのですか？」

兵力はざつと3千。

ブリュンヒルドが言っていたことは、ゴルバの部隊がちょうど横を
通つて進軍していったことだ。

進軍中の一人の兵に聞いてみればこれから魔王軍の所へ行くと聞け
ばなおさら部隊を徴集すればより多くの兵力なつたからだ。

「たぶん、指揮系統がバラバラになつて自滅すると思うからそれな
ら別々で行動したほうがいいからね。」

千夏は、はつきり堂々と返答。

「それなら、よろしいのですが……」

ブリュンヒルドは、不満そうな顔になる。

「それより、私の部下つていうことでいいのね？」

「はい、オーディン様がそうおっしゃったので…」

「そう……」

千夏は、このブリュンヒルドを信用できなかつた。

千夏自体、オーディンと神族を信用していなかつたが兄貴を連れ戻せれるというのがあつたためにこの状況に乗つたのだ。

「まずは、魔王軍の実力がどれくらいなのか調べてみないと……」

「この戦い、魔王軍が勝つとでも」

ブリュンヒルドは、口をとがらせて言つた。

「たぶんね。直感で感じるの…」

千夏は、自分で一番信頼が出来るのは知識でも友でもなく直観だと思つてゐる。

あと、兄貴も…

「いや、違う…」

「どうしたんですか！？」

「何でもない。何でも…」

千夏は一瞬、信頼できるのが兄貴と思い浮かんだのを慌てて否定したのだ。

「そうですか……」

ブリュンヒルドは、渋々頷いたのだ。

「それでは、兄貴の腕前を拝見しましょーか…」

千夏は、これから戦場になる辺りを見て言った。

第十一話「ある意味、指揮官に向かって立てるな」

魔王軍一行は、一晩明けて新しく合流した部隊との再編成を行っていた。

「こんなもんでいいんじゃないのか？」

タクミが、リザード^{ジョージ}から編成の説明を受けて納得していた。

「エリス？いいよな？」

「はい、いいんじゃないですか？」

頭にはてなマークが浮かんで首をかしげている。

「何で、首をかしげているんだよ。いちおう魔王軍の長^{おな}だろー。」

エリスは、真実を言いたくないような顔をする。
そこで、リザード^{ジョージ}が答える。

「それは、今まで私が指揮をしていたのです。」

「それって、指揮していなかつたのか今まで…？」

タクミがエリスの方を見るとエリスはあたふたして

「だつて、今まで軍隊を指揮の仕方なんて勉強していなかつたし…

…それに…それに！」

エリスは、それに、を連呼する。

「いや、エリス様は支えてとなつてあります。」

リザード^{ジョージ}がフォローをする。

「そうなんですよー私は考えるのが苦手なんです。だから、だから

ジョージさんに任せてたんです！」

子犬のように叫ぶ。

タクミは、リザード^{ジョージ}を呼んで小声で話す。

「本当なのか？」

「本當です……エリス様は魔族の皆から守りたくなる存在らしいです。私もそうなんですが。そのために、今残っているのは、エリス様をお慕いして守りたい根性がバリバリある奴らばかりなんですよ」

「ある意味、指揮官に向いているな」

リザード^{ジョージ}が大きくうなづく

「そうなんです。」

「エリスの才能だな、守りたくさせるようなのは」

「まったくもつて」――

人が目の前でこそこそと密談しているのが気になつたエリスが大きな声で

「二人とも何しているんですか！――」

その声に、二人はビクッとして振り向いた。

「エリス様、これは必要事項を確認していたのです。」

二人は慌てて取つてつけたような言い訳をする。

「そうだ！ エリス。必要なことだつたんだ！」

タクミの中では本当に必要なことだつた。

何でエリスの元に魔族がついていくのか不思議だつたからだ。

今回の話を聞いて納得してエリスの仁徳に感心した。

「やうなんですか……どうせ私はいつも邪魔者ですよ～だ。……
・ぶつぶつ」

エリスが自己嫌悪しているのを見かねたタクミは、フォローを入れるににある。

「大丈夫だ。お前は立派な指揮官だ！……ある意味……
しまつた口が滑つた。」

「ある意味つて……ひどいすぎです」

エリスの目頭に水がたまっている。
もうすぐで決壊しそうだった。

タクミがやばいと思つていた瞬間。

「ガブツ」

「いつた／＼／＼／＼」

タクミの腕を突然がまれ何ともいえない痛さを感じた。

「誰だ…つてフェンリルか！…」

腕をかんでいるのはフェンリルだつた。

（おのれ～～～貴様！わしの娘を泣かせるとは不届き者め…やはり
亡き者しておくべきか！？ああ…）

「急にキレるな！泣かせていいだろ！…」
(問答無用！…)

さらに飛びつこうとしたのだが
「！」の野郎！調子に乗つて！…
タクミがフェンリルを振り払う。

二人は睨めあつて距離をとる。

「ガルル！」

「やつてやる！」

二人の目線で火柱が立つていると、

「あはは、二人とも面白い」

急に隣で笑い出したのはエリスだつた。

「タクミさんも犬みたい…クスクス」

お腹を抱えながら笑つている。

そんな笑つているエリスを見て二人ともケンカをするのをやめた。

そして眺めている。

楽しそうに笑つているエリスを…

「たつぐ、誰のためにやつてると思つていてるんだ！」

タクミは、内心ぼやいた。

二人と一匹のほほえましい光景に突然釘を刺された。

「大変です。人族がきました。兵力はおよそ2000後半です…！」

そいつは、息を切らしていた。

「そうか…もう来たか…この先に開けた土地でもあるか？」

「はい！ちょうど、そこで敵は陣を引いています。」

「タクミさん、やじりて出口ですよ。そこを通らないといけません。」

エリスが慌てる。

「たぶん、俺たちの場所を特定されて先回りされたな……とつあえず、抜けるにはそいつらを叩かないといけないから全軍進軍するぞ!」

タクミの言葉と共に全軍が陣形を立て直す。

その合間にエリスはタクミに訪ねる。

「タクミさん大丈夫なんですか!-?」

「ああ任せとけ!」

陣形を整える。進んでいる途中

タクミはフェンリルに近寄り話しかける。

「ダーインスレイブってどう使えるんだ?」

(ダーインスレイブが答えてくれるだろう。ただし、“20%”ぐらいの力にしておけ)

20を強調させる。

「何で20なんだ?」

(100で打つと世界が持たない。)

「まじでか!-!」

タクミは驚愕の事実にビビり、とんでもない剣を手に入れたんだなと思つた。

「なるほど…それなら単純な作戦で行くか!」

(わしさ、口出しがしないがエリスを守るために何でもする。)「期待しないでおくれ!-!」

タクミは、作戦を考えた。進んでいくとひけた場所に出る。そこには、人族の部隊が横長く展開していた。

「俺たちを通さない気だな。」

「どうするんですが、中央突破にするんですか？」

エリスは今回の状況の打開策が浮かばなかつたのでタクミに託す。

「そうすると、囮まれてあつという間にやられるな、前に俺たちが取つた作戦と似ていいな」

「どうするんですか！？」

「大丈夫だつて」

タクミは、余裕の顔をする。

「そうですか…」

エリスは、タクミのそんな顔を見て安心するのだ。

「何かタクミさんつて、不思議だなー」

自分に向かつてささやいているエリスであつた。

第十一話「ある意味、指揮官に向かってこな」（後書き）

感想・評価など待っています。

第十一話「わ、これつを試して見ますか！」

「魔王軍。現れました。数は、およそ2000！前の戦いより増えています。」

今度も若い偵察兵だつたのだが前の顔とは違つていた。

「そうか、あの森に隠れていた兵力と合流したのか……お前は、優秀だな！お前の前任がどうなつたかは聞いておるだろ？がそうならないようにがばつてくれ！…」

「は、はい！…」

逃げるよつにして去つて行つた。

前の戦いで偵察に出ていた兵は、戦闘終了後一晩建つたら謎の死に方をしたらしい。

噂には毒薬で殺されたと言われている。

理由は簡単でしつかりと敵の配置などを調べなかつたからだらつ。

今回の偵察兵たちは必死なのだ。

そして、ゴルバを恐れていた。

偵察兵以外にも怖がつてゐる兵はたくさんいた。

ゴルバは、そんな事には気づいていなかつた。

「これで、魔王軍の命もつきたたわい。ぐはあはは！…」
兵たちの心情も知らないで、陣内で大笑いしていた。

「ゴルバ様、これならいけます。今度こそ魔王軍の奴らを亡き者にできましょ。」

グスバルは、ゴルバの事をほめていた。

しかし、袖に隠れている手が震えていた。

内心では悔しのだ。

こんな野蛮な奴に俺が負けるとはそんなことを内心で考えて、ゴルバに向かつて同意をしていた。

「千夏様！ 危険です。」

「大丈夫だつて！」

千夏とブリュンヒルドは、両軍が見渡せる位置にある山の上から見ていた。

「心配しすぎ！ たぶん両軍ともに伏兵なんていないでしょ！」

「どうしてそんなことが？」

千夏が当然かのように言つたため何でそんなことがいるのか不思議だつた。

「両軍ともに伏兵に裂ける兵力なんてないだろ？ し、兄貴も今回は伏兵に回す時間なんかがなかつたから。」

「そうですか……ですが、護衛の兵も連れてこずには一人だけでここまで来るのは少々危険なのではないでしょうか……」

周囲には、木が生い茂つており、ちよつといじだけが日の光を浴びれる場所だつた。

そこには千夏とブリュンヒルドしかいなく千夏は双眼鏡的な物で状況を確認している。

「心配しそう。私とあなたが戦えば100人ぐらいは簡単に倒せるでしょ？」

「その通りですが……」

その100人という言葉には、何にも疑問を持たなかつた。ブリュンヒルドで本人もそれぐらいはいけるだろ？と自負しているからだ。

「それにこりなら……」

千夏がそつと呟きそうになつた。

「何ですか！？」

ブリュンヒルドは、うまく聞き取れなかつたために聞きかえしたが

「何でもない。」

千夏は誤魔化したのだ。

千夏の中では、もし負けてバカ兄貴が死にそうになつても助けに行けられる位置としてこの場所を陣取つたのだがそれは、心の奥隅へと隠した。

千夏は、心配そうにでも真剣にそんなような複雑な心境で戦場を見ていたのだ。

魔王軍がゴルバの部隊と対峙した。

陣形は、相手とまったく同じだった。

距離的には、弓をうつたらギリギリ届かない絶妙な位置にいる。

「どうしますか？？」

エリスは、先ほどからこの言葉を何分かおきにはタクミに聞いていた。

「さつきから、そればつかりだなー。」

いい加減うつとうしく感じられたのかエリスに向かつて言う。

「だつて、だつて、心配なんです！絶体絶命じやないですか！これ
からどうするんですか！！」

「ねちねち、ねちねち、へるせしなエリス」「そりやあ、こんな状況じやうるさくもなりますつて！」

子犬トテラジガ言ニ佛ニシテムアリガシテ

「お一人とも静かにしてください。わが軍の士氣を悪くするかもし

リザードDが突っ込む。
『ジョージ』

九三

エリスは小さくなつたよへは じゆんとなる
それを見立リザーバーの隠れて ジョージ

「いや、エリス様は悪くないん

口をとがらせてタケノコは怒り

「二人とも落ち着いて」

何やら先ほどの風景とはガラッと立場が変わったみたいだ。
エリスが子犬のように震えていると

そこに

(タクミー！わしの娘を泣かせるなー！)

「ガルウ——」

いつの間にやらフエンリルがいた。

「何だ！？このクソ狼が！！」

そう言つとフエンリルがどびかかり

「ガブツ」

「痛い、痛いってギブギブ、ってか『冗談抜きに痛い！』
かまれている腕を必死に上下させながらタクミは叫んだ。

（これで懲りたか！）

そう言つてフエンリルはまたどこかいつてしまつた。

「たつく、なんであいつは、エリスを泣かせると会わられるんだよ
！」

タクミは、かまれた腕をさすりながら言つた。

「やつと落ち着きましたか……」

「誰のせいだと思つてるんだ……！」

「ひやうう！」

タクミの大きな声にビクツとするエリス。

（お前……懲りてないようだな……）

タクミは、瞬間に殺氣を感じ取る。

その方に振り向くと目を光らせている動物がいた。

「エリス、大丈夫だ！俺に策があるから！」

怖くなつて慌てて、そういうて取り繕つに言い。

ダーインスレイブを取り出した。

「さて、こいつを試しに使って見ますか！」

剣を抜いてダーインスレイブの全貌が見える。

紫色みたいな色に、中心は黒色の線が入っている。

デザインは実にシンプルで宝石みたいなものは一切なかつた。

「これが……ダーインスレイブ……」

エリスは口をポカツと開けていた。

「ああ、行くぜダーインスレイブ。」

そして、タクミはダーインスレイブを構えた。

第十四話「私が魔王に…あなたが勇者」

タクミは、ダーインスレイブを肩におき、歩き始める。
「ちょ、ちょっとタクミさん! 魔剣を使うんですか…?」

「あ、もちろん」

タクミは歩きながら返事をする。

元々、ダーインスレイブを使うことを前提にして作戦を考えていた。
とはいっても、作戦は単純で、ダーインスレイブによるかく乱し、
そしてそのまま一斉に突撃させるという作戦だ。

作戦としては物足りないだらうがシンプルこそいい時もある。
実際の所それぐらいしか活路を見いだせないと思つてているタクミが
エリスに返事をし。

前に歩き出す。

そうすると何事かと魔族の兵たちはこちらを見てくる。

魔族の兵たちはよく見覚えのある剣を見て固まる。

それはそのはず、以前魔王が持つていた魔剣なのだから。

そして、その剣で何度も戦場を一変させてきたことを知つているからだ。

今、彼らの前には魔剣を持つて現れたタクミに釘づけになる。

「ほんまにあんな男があの剣をもつてはるのか……」

そのちょうど横には、ゴブリンAじゅんとタクミの方を見ている。

「いやー魔剣一つ持つだけでここまで様になるとは、さすがでっんな!」

棍棒を片手に持ちながら言つ。

そして、去つていくまで視線を離せなかつた。

「ああ……タクミさん！」
骨子がいた。

どんどんタクミは進んでいった。

タクミの進んでいる先は、誰もいなかつた。

魔族たちはどうしていたのだ。

その姿に魅せられていた。

かつて、自分たちの窮地を救ってくれた魔王と重ねていたのだ。
タクミが、エリスによって勇者として召喚させられた事を知つている人は少ない。

だから、魔王がまた再来したのかと思つていて、
その姿に嬉しくて震えているのだ。

今まで魔王が死んでから、負ける一方だつた。

この戦いは自分たちで終わるのか……

そんな気持ちでいっぱいだつたのだが、ここに現れた一人の男に期待をしていた。

そう……魔王が現れたのだと。

タクミは、兵たちの一番前までくる。

そして、ダーインスレイブを持つ。

「タクミさん……なんだかかっこいいです。」

エリスの気持ちは高ぶっていた。

そして、顔が熱くなつて赤くなるのを感じた。

それがどのような心情でそうなつたのかはエリスにはわからなかつた。

「タクミ殿が昔の魔王様みたいに見えましたよ……」

リザードロは、懐かしむような顔をする。

「やつぱり、勇者じゃなくて魔王なのでは？？」

リザードロがエリスに言つ。

「いえ、確かに勇者を呼びましたよ！私たち魔王軍の勇者を……」

エリス自身勇者とか魔王の定義なんて考えたことがなかつた。

魔王とは……一般的な解釈では人に災いを与えたり、悪の道に陥れたりするのが常識なんだらうが。

エリス達魔族からして見れば救世主的な意味合いを持つている。

人は魔族を偏見し悪い奴なのだと決めつけている。

そして、それを迫害して追い出している。

実際に今までの戦いも土地を守る戦いなどが多くてそのために戦つていた。

だからと言つて人族が全部悪いわけではない。

人族もいつかはここも取られるんじゃないかといつ恐怖に蝕まれてゐる。

そうして、戦いは起るのだ。

戦争なんて言つのはやらないのが一番だと思つただがそれでも起きてしまつ。

最初はどんな小さな喧嘩でもそれがやがて国、種族を巻き込んでしまつ。

言つてしまえば国同士の喧嘩なのだ。

主義主張を旗印に戦つてゐる。

決して頑固だからとかそんななんではない。

ただ、自分の意見を通すそんな簡単なことで戦争は起きていく。

止める事なんてできないのだ。

やつして起きる戦争の中で英雄と呼ばれている人たちが出てくる。

それと同じように魔王の中では、魔王が英雄なのだ。

だから、勇者と魔王は根本的に意味は同じなのかもしない。

ただ、敵味方の違いだけなのかもしれない。

そう感じているのだエリスは・・・・・

「タクミ殿は、魔王軍の勇者ですか……それなら、エリス様には魔王になつてもらわないと…」

リザードン^{ジヨーデン}がエリスに向かつて優しく語りかける。

「私が魔王に？？」

「そうです。私たち魔王軍の救世主となるべくお方なのです。エリス様は」

「私なんかが務まるわけないじゃありませんか……」

エリスは、下を向きつつ袖をつかんでじつと黙つていた。

「エリスが軍を引っ張つていけ、そして俺がお前の頭となつて引っ張つてやるから心配するな。」

タクミが前に言った言葉を思い出した。

「私の頭になつて…引っ張つてやるか……」
そんなことを思い出して小声で一言つぶやいた。

そして、自分に向かつてしゃべった。

「私が魔王に…あなたが勇者に…」

エリスは、私が魔王という救世主になつて、タクミが魔王軍の英雄
という勇者になつて、この世界をよりよくしたいと思つた。
それは、エリスにとって初めての願いなのかもしれない。

エリスは、タクミと会つた当時は戦争なんて嫌いでみんなで平和な
場所で暮らしていけばいいと思つていたが、

現実はそんなに甘くないことをこの数日で思い知つた。

逃げても逃げても追つてくる人族の人達・・・
そして、逃げて行つた魔族の人達・・・

いろいろなことを感じた、いや、こんなことはほんの少しなのかも
しない。

だから、エリスはもつと世界を見たいと思つた。

魔王として・・・・・

「ジョージさん、私は、魔王になります。みんな、魔族として
人族の魔王……救世主になつて見せますよーー！」

「そのお言葉をお待ちしておりました。」
リザードロ^{ジョージ}が畏まるようにして臣下の礼をする。

（ようやく、決意してくれたか……わが娘よ、いや、魔王ー）
フェンリルは娘の言葉を聞いて安心したがどこかさみしくなつた。

新たに決意をしたエリスと、

嬉しく思うリザードン^{ジョージ}と、

さびしく思うフンリルと

二者違う気持ちを抱えているが

三人ともタクミの雄姿を眺めている。

第十五話「あれっ！？」

タクミが、魔王軍の最前列まで来る。

「さて、このダーインスレイブの力を見させえ貰いますか！…」
ダーインスレイブを構える。

そうするとタクミの中に何とも言えない力が流れ込んでくる。

「使い方がわかる……」

頭の中に流れ込んできたのだ。

使い方などが一瞬でわかる。

そして、力をためていく。

ちゅつとぢゅつちゅつとぢゅつ・・・。

そうでもしないと、力が暴発してしまいそうなほど魔力が流れ込んでくる。

タクミ自身、魔法なんかは使ったことはないし。

それに魔力なんてものを感じたことがなかつたのだがそれでもわかる。

これが魔力なのかと……

とっても不思議な力が流れ込んでくるのが。

タクミの額に汗が出てくる。

熱いからとかではなく。

手にして出てくる汗だ。

ダーインスレイブの制御にはものすごい集中力がいる。

今でも、ダーインスレイブを持つて立っているのがやつとなほだ。
体がふらつきかけるが
じつと耐える。

「あの、魔王はこんなものを平気で操つてたのか……バケ者だなー。」
少し魔王の事を見直してみたりしている。

周りに少しずつ魔力が漏れ始め。

地面を押しつぶす。

タクミは耐えている。

今すぐにでも倒れたいのだがプライドが許さない。
やつぱり男なら一度ぐらいはこういう経験をしたことがあるんじや
ないかな。

タクミはそう思った。

「もうそろそろかな……」

それは感覚的に分かつたことだ。

タクミ自身は集中して気づいていなようだが。

周りは魔力によってどんどんへこんでいつてい

それを見ている魔王軍もちょっとずつは下がっているが。

それでも見とれていた。

人族の部隊も同じだつた。

何かが始まるとわかつていても、動けないでいる。

戦場が一人の男に注目する。

そして、見ていううちに迫力が増していき。

ついに時が来た。

「それじゃあ、新たなる世界への開幕と行こうか……ダーラインスレ
イブ！」

タクミが叫び力をすべて出そうとした……のだが……

「あれっ！？」

タクミは体が斜めになつていることに気付いたのは、ダーラインスレ
イブの魔力を開放した瞬間だった。

ズドオオ――――ン――――！

轟音が戦場一帯に巻き散った。

そして、タクミは尻餅をついた。

「…………え…まさか…外した！…？」

魔族は啞然としている。

驚きをあらわにしていた。

別の意味での驚きを……。

タクミのダーインスレイブの魔法は、斜め上の山に直撃していた。

いや、元山だつたところに…・・・

それを見た人族は、最前線にいた兵達が逃げ始めた。
それを見た真ん中にいた部隊なども逃げ始めた。

あるものは叫び。

あるものは武器や鎧をしてて。

走つて逃げる。

部隊は自然消滅となつた。

未だに何が起きたのかわからない。

魔王軍は、人族が逃げて行くのをただ眺めていただけだった。

「すゞいな……ダーアインスレイブ。」

タクミは、尻餅をついたまま笑った。
自分の姿がおかしくて笑つたのだ。

タクミが外しただけなのにそれを見て人族が逃げている姿が滑稽だ
つた。

人族は恐怖のあまり逃げて、魔族は呆然眺めるという面白い風景で
戦いは幕を閉じたのであつた。

エリスは、タクミが外した瞬間に。

「やつぱり、タクミさんはタクミさんですね…ふう…あはは…！」
お腹を抱えんがら笑つた。

「タクミ殿ジヨーリが外した……」

リザードDは、口を開けたままでいる。

（「はあ～～～」この先が心配だ……）

フェンリルはため息をついた。

「可おか笑しい。タクミさんが外しましたよーー！」

エリスは、明るい笑顔をする。

リザードDは、エリスのこんな笑顔を久々に見たために昔を思い出
しながら微笑んでいた。

そして、エリスは見事に外して帰つてくる勇者を待つた。

「はあ～～～～。バカ兄貴は、バカ兄貴ね」

千夏は木の上から一部始終を見た感想はたつた一言だつた。

魔王軍の中から出てきた兄貴はかつこ～～～と思つてしまつたのだが。ふたを開けたらびっくりつてな感じで見事に期待に応えてくれたと、いう安心感に包まれた。

「……私つたら何を安心しているの？」

そう小声で自分につぶやいた。

そして

「撤退ね。ブリュンヒルド」

「しかし、今戦えばこちらに勝機があるのでー!?」

ブリュンヒルドは、千夏をにらみながら抗議したが。その視線をまったく無視をし

「たぶん、兵力が同じだから最終的には士氣で決まると思つから。無理ねーー！」

言いきつた。

「しかし……千夏様にはエクスカリバーがあるではありませんか。」

「そんのはあつちだつて魔剣を持っているんだからお粗子よ。」

「しかしーー！」

ブリュンヒルドは、内心焦つているよつた顔をしながら反対するが・

「撤退して、オーディンに増援を貢がないと。あと、ブリュンヒルド。この判断は私が独断でしたことだからあなたには関係ない。わかつた！」

「それなら……いいでしょ……」

ブリュンヒルドは渋々頷いたのだ。

千夏は、ブリュンヒルドがオーディンの事を敬愛していることを見抜いて先ほどの言葉を言ったのだ。

自分に責任がないとわかれれば意見に賛同するだらうと気づいた。

千夏たちの部隊は何事もなかつたようにひつそりと撤退すのであつた。

一方、人族の部隊は混沌に包まれていた。

「撤退するな……あんなのはつたりだ……」

ゴルバは大声で叫んでいるのだが、

ゴルバの恐怖よりもダーインスレイブの威力の恐怖の方が勝つたのだ。

「くそつたれ……使えん兵ばかりだな……」

ゴルバは、馬の準備をさせて撤退の準備にかかつた。

この状況では、戦うことはできないだろうと思つての決断だ。

「あの力は……」

グスバルは、魔剣の力に魅了された。

そして、感謝もした。

これで自分の番が来ると思ったからだ。

グスバルは、にやつきながら戦場から離れていく。

夕日がきれいな中でそれぞれの思惑を胸に宿したまま戦場から去つて行つた。

第十五話「あれつー!?」（後書き）

誤字脱字があつた知らせください。

感想・評価待っています。

第十六話「俺が勇者になつて、お前…魔王を助ける…！」

太陽が山に隠れよつとした頃にタクミはエリス達のもとに帰つてきた。

「ただいま！」

手を振りながら戻つてきたので、エリスも手を振りながら

「おかえりなわ～い～！～

満面の笑みで返す。

「いや～俺の作戦通りだつた。」

「あれが、作戦！？ビックリ見ても「ケて外したよつ」としか見えなかつたんですけど…」

エリスは意地悪そつた視線でタクミを睨めよつとした。

「まあ、最終的には敵が逃げてくれたんだし、結果オーライと言つことにしておきませんか…？」

手を頭の後ろに置き誤魔化すよつて早口で言つ。

「タクミさんらしいこと言えばらしいのですけどね。」

エリスは、タクミの姿を見てそつにつた。

「タクミ殿このからどうするんですか？」

リザードン^{ジョージ}がタクミを助けるかの」とく口をはさんだ。

「ああ、そうだな…まずは一_一日_一で休憩だな！」

「一日_一ですか？？人族の部隊に襲われる可能性はないのですか？」

？

リザードロード、心配そうな顔で見てくるが

「たぶん、ダーインスレイブの力に怖気づいて攻撃はしてこないだ
ろ?」

「確かに……そうですね……タクミさんのおかげですよ……クスクス」
エリスは、口を手で押さえながら話していく。
今にも吹き出しそうな勢いだった。

「お前……一つから俺に對して皮肉を言いつけるようになったー?」

「もうひんー魔王になつてからです。」

タクミは、エリスが堂々とものを言つたことにも驚いたのだが、
何より自分の事を魔王と言つたことこびっくりする。

「魔王……って、お前どうしたんだ!?」

タクミは、ここに来た時点でエリスが少し変わったことに気付いた
のだが無視してきた。
しかし、今回の魔王発言でますます気になつた。

「それはですね……私は魔王になる決意をしたんです。」

「魔王に!?」

「はい!」

タクミは、先ほどの言葉に耳を疑っていたのだが今回はまつきと
聞こえた。

私は魔王になると・・・

「なんですか？」

タクミは、出会った当初のエリスとは信じられない変貌ぶりだった。最初はただ、平和なところで暮らしたいと言っているだけだったのに今ではそんなことを言つていらない。

「私には、夢があります。この世界を神族、魔族、人族関係なしに暮らせる。そんな世界を作ることです。そのために必要なならば私は魔王にだつてなります。」

「お前から、世界を作るなんて聞けるなんて思いもよらなかつたよ。でも。この先に待つてているのは大変なことばかりかもしれないぞ！」

？」

タクミは、覚悟を確かめるために声を大きくしていった。

「大丈夫です。だから私は決意したのです。魔王になると……」

エリスのまっすぐとした視線を感じたタクミは、頷き。

「よし、わかつた。それじゃあ、俺も勇者になつてやるよ。お前の夢をかなえるための勇者に……」

「タクミさんが勇者ですか？頼りないですわ。」

「ううせえーお前こそ魔王なんかに向いてないわ！」

「何ですか～～」

そしてどちらが先かわからないが笑い声が聞こえ始めた。二人して笑っている。

「俺が勇者になつて、お前…魔王を助ける…」
タクミ宣言する。

「はい、私も魔王になつて世界を作るために頑張ります。だから、勇者さんは頑張つて付いて来てください！」

「お前こそ、先にへこたれるなよ…」

「もちろん…」

エリスとタクミは、互いに握手をして、気持ちを確かめ合つた。

こうして、一人の少女は、世界を平和で平等とするために魔王になることを決意し。

一人の少年はその魔王を守り世界をよりよくすると宣言したのだ。

こうして、魔王と勇者が手を組んだ。

太陽が隠れかけ暗くなりつつある夕暮れ時に世界をこの後灯していく大きな光りが出来た事を知る者は誰もいない。

その後暗くなり、今度は焚火の火で明るくなつた。

（お前は調子に乗りすぎだ！）

タクミは一人草原に寝転んでいたところにフェンリルが来る。

「何だ？ フェンリル？」

（まったく、エリスが魔王になることを決意してくれたから今回の事は許してやる。）

「今回の事つて何のことだ？』

タクミは、ダーインスレイブを使つた疲れでへとへとだつた。

（まあ、いい。それよりもダーインスレイブをもうちょっと使つこなさないと宝の持ち腐れだ。）

「うつせー

タクミが寝転がつてゐる横にオオカミが座つてゐるとう奇妙な光景だつた。

（まあ、お前の気にあることでもないか。その内お前がしつかりと使えこなせる時が来るだろ。）

一言、意味深な言葉を残して去つて行つた。

タクミはフヨンリルと別れた後にエリスに呼ばれた。

そしてエリスとタクミ、軍の隊長格の人たちが集まって今後について話し合ひとこなつた。

「それで、これから、どうするんですか??」

エリスの第一声を発した。

なんともエリスらしい発言だなとタクミは思つ。

タクミは一つ疑問が出てくる。

「そういや……ここんとこ忙しへて聞けなかつたけど、魔王つて元々領地持つてたのか?」

魔王は、あと一歩で勝ちそうなところで負けたわけだからかなりの領地を持つてゐるはずだと思つたタクミが聞く。

「はい、タクミさんには説明していなかつたと思ひますがここいら辺一帯はすべてお父様の領地だつたんですね。」

「なるほど……」

タクミは、少し間をおいて

「それじゃあ、魔王の旧領地はこの世界のどれくらいなんだ?」

「それは、五分の一です。その他にも魔族の領地はたくさんあるのですがお父様の領地は五分の一です。あと、タクミさんには言つていないことなんんですけど、北の方は、もの凄い高い山があつて行けないんです。だから、この土地は、山から南の事になりますね。」

よつあるこ、一つの大陸ではなく、北に高い山のある南の一部と言

うことだ。

まだまだ世界は広いんだなとタクミは思う。

「こ」の土地の名前ってなんていうんだ?」

「こ」を、トリオスと言います。」

「トリオスね……けど、世界はまだあるんだろう?」

別の世界からきたタクミからしてみればこら辺一帯では小さい過ぎる。

「たぶん……」

「地理的な状況は分かつたから、次に魔王軍の目指す目標が決まった。」

そのタクミの言葉に、魔族の隊長格の人たちがざわめきつく。

「なんですか?」

「まずは、旧魔王領の奪還だ!」

「なるほど、まずは、地盤固めてからですか?」

頭に電球が光ったエリスは納得する。

「そうだ。」

「でも、大丈夫なんでしょうか?最近では大分、人族が入つて来ていますし、国境沿いの砦も頑丈ですよ……」

しおらしくなり言う。

「大丈夫だつて!」

「何ですか?」

「やつやあ」

タクミが時間を置き。

「始まり方でヒピローグが見えてくるからだ」

「ヒピローグ？」

ヒリスが首をかしげる。

「始まりが良ければだいたい、あとせつまくこぐらにもんだー。」

「やつですか？」

ヒリスは信じていなこよつた感じで首をかしげて見せるが

「やつだ！」

タクミは言こ切る。

次に魔王と勇者は、旧領地の奪還に乗り出した。

第一章 人物説明

人物説明です。

本文中に容姿、姿が詳しく書かれていなかつたので補足的に書きます。

（作者の力不足ですいません。）

両羽巧

種族：異世界の人間

本作の主人公。

高校二年生で、本を読むのと料理するのが趣味。

一枚目と違うよりかは、三枚目に近い容姿。

身長、170前半。

体重、60前半

黒と茶色が混じつた髪の毛

エリナによつて召喚されて、勇者として頑張る。

魔剣、ダーインスレイブが武器。

エリス

種族：魔族？？（父は魔王だが、母は種族が不明。）

小動物系。魔王から過保護に育てられる。

身長、150前半

体重、不明

髪の毛が水色で肩より少し下まである。ますぐしてなく、途中で跳ねたりしている。

魔王軍の司令官で魔王の娘。

タクミを召喚する。

両羽 千夏

種族：異世界の人間

男勝りな性格。

タクミより一歳年下。

中学2年の夏に突然性格が変わる。

タクミは、いまだにそのことがわかつていない。

身長、160前半

体重、不明

タクミの髪の毛の色と似ていて、肩にかかるない程度の短い髪の長さ。

神族に協力している。

聖剣エクスカリバーが武器。

フェンリル

種族：動物？？

エリスを過保護なまでに可愛がつていた。
エリスのためなら何でもやるという親バカぶり。

体長、1.5メートル

体重、重い

毛の色は、黒とねずみ色でお腹部分が白い。

今は、魂のみ存在していて、狼に乗り移った。

オーディン

種族：神族

ヴァルハラ宮殿に住んでいて、神族の中で一番偉い

身長、160前半

体重、不明

金色の髪の毛で腰辺りまで髪がある。

いろいろと謎が多い人物。

フレイヤ

種族：神族

神族の一 番槍と言われている。

身長、160後半

体重、不明

赤色の髪の毛で、まつすぐとした長い髪の毛

いろいろと謎が多い人物。

ブリュンヒルト

種族：神族

オーディンの事を心から慕つて いる。

身長、160前半

体重、不明

髪の毛は金髪のロング

千夏の事を快く思つてい ない。

ゴルバ

種族：人族

勇猛果敢で直觀がするどい、ただしたびたび上官の命令を聞かないため昇格できずにいる。

身長、160後半

体重、80前半

髪の毛はない。

グスバル

種族：人族

若い士官。

自分の知略を自負して過信しすぎるがために負けることが多い。

顔のおでこあたりに手を置くのがクセ。

身長、180前半

体重、60後半

銀髪の髪の毛で方ぐらいまで長さがある。

主要人物はこんな所ですね。

次は、意外に出番があつたキャラ。

ジエンジい

種族：魔族

リツチ 一番古参の重臣。エリスの魔法の先生でもある。

ジョン

種族：魔族

ゴブリンA 下つ端 大阪弁らしく話す。

ジョージ

種族：魔族

リザードD 指揮官 参謀役を務める。

骨子

種族：魔族

スケルトンB よくバラバラになる。

魔族の兵の種類。

ゴブリン・・・武器が棍棒か弓

スケルトン・・・防御力が最弱だが、何回でも蘇る

リザード・・・頭がいい

ウイッチ・・・攻撃魔法が使える。魔法ダメージ四分の一
リツチ・・・魔法全般が使える。魔法ダメージ四分の一

あとがき

みなさん初めまして、「魔王と勇者のタクティクス」を読んでください
ありがとうございます。

一章が終わりましたが、ハーレムになつてないだらうと思つて
方もいると思います。

徐々に増えていく予定です。いや、増えます！！

今後もよろしくお願いします。

誤字脱字、感想、評価待っています。

イラスト、レビュー等を書いてくれる方を募集しています。

第一話 「大丈夫だ。お前がいれば…！」

タクミが宣言してから一夜明けた毎過ぎに再度作戦会議が開かれることになった。

「それで、エリス。この辺の勢力図的のを教えてくれ。」

「はい、まずはこここの魔剣が眠る森があつて…」

エリスがこれから説明しようとしたときにタクミが口をはさむ。

「ちょっと待て、前から気になつたんだが、魔剣の眠る森つて名前がないのか？？名前は？？」

「それは…特に何もない深くて暗い森だつたので特に名前なんてつけてませんでした。」

魔剣の眠る森の重要度の低さがわかる。

「それなら、こここの名前はダーインウッドで決定だな。」

「ダーインウッドですか…魔剣ダーインスレイブが眠つていた場所にぴつたりですね。」

エリスは、こくこくと頷き賛成する。

そして、エリスが続きを説明する。

「それでですね。このダーインウッドより南にはいくつかの村があります。村といつても数百人は住む大きな場所もあれば数十人だけつてところもあります。」

タクミは頭の中で地図を作り出す。

ダーインウッドから南には複数の村があり。

数百人規模から数十人規模まで大小さまざまな村がある。

「そりいえば…魔族つて今どこにいるんだ？？」

タクミが素朴で当たり前の質問をする。

「今は、山の奥に隠れて住んでいたり。ここの中のダーラインウッドにも結構の数が住んでいますよ。あとは人族と共存していますかね。」

「人族と共存？？」

タクミは、ずっと魔族と人族が仲が悪いのかと思っていた。

「お父様が占領した土地の人族を追い出さなかつたために複数の村では共存できていたんです。そして、少しずつ増えてきた矢先にお父様が殺されて。そして魔族が迫害を受けるようになつたんです。」「なるほどな」。それならエリスは何をしたい？

「何をしたい？？」

タクミの急な支離滅裂な質問に首をかしげるエリス。

「ああ、お前がどんな風にしたいかってことだよ」
タクミのそんな質問にすぐに答える。

「もちろん。人族と魔族との共存です！」

タクミはにやつき。

その言葉を待つてましたかのよつたな感じだ。

「それなら、俺たちがやることは一つだ。」

「一つ！？」

「人族の村を武力じやなくて説得しに行くぞ！」

エリスが慌てた感じになる。

「説得ですか！？無理ですよ！！」

「大丈夫だ。お前がいれば！！」

タクミが親指を立てて最大限にアピールする。

「ここいら辺の人族の集落は、戦争が起きた後にできた村ばかりなんですよ！？」

エリスの言っていることも、事実だ。

「みんな、魔王族が負けたがために逃げてきたりその戦争被害によつて新たな場所を求めて来た人達ばかりなんですよ！」

「だからこそ意味がある。それで、エリスここいら辺で一番でかい村はどこだ？」

「…むりだつて言つてるのに……」

自分の押しの弱さに後悔しつつ答えてしまつのが何ともエリスらしい。

「え～とですね。たしかヘイモ村つてところが数百人規模で大きかつたはずです。」

「よし、まずそこから説得だな。エリスと俺の二人だけで行くから魔王軍はここで待機だ。」

その言葉に驚いたのはエリスではなく、リザードンだった。

「危険です。タクミ殿ならどこに行つてもいいですがエリス様は危険です。」

真っ先に反対する。

「俺はどうでもいいのかよ……」

タクミは、心が傷つくるのだが反論する。

「なんでエリスはダメなんだ？」

「それは、魔王様として魔王軍の司令官でもあり。重要度の高いお方だからです。さらにタクミ殿はダーインスレイブを持つてゐるか

「らいいかもしませんが、エリス様は何も持つていません。」

「それは、エリスを甘やかしそうだろ？それにエリスは魔法が使えるじゃないか？でも……そこまでへなちょこなら仕方ないか。それなら俺一人でもいく。」

タクミが挑発みたいな感じに言つ。

エリスの田の前でタクミとリザードロ^{ジョージ}勝手に言い争い。

さらにタクミのへなちょこ発言が気に食わなかつたのか体をブルブルふるい始めて。

「タクミさん！やりますよ！説得やつてみますよ！私の力をなめないでください！…」

「そりか！それは良かつた。それじゃあ、俺とエリスはヘイモ村に説得に行つてくる。」

エリスの考^{ジョージ}えが改まらないことにつきさせとで決定する。リザードロは、エリスが行くと言つたのでそれ以上反論する事が出来ずに渋々頷いたのだ。

「それじゃあ、明日に俺とエリスはヘイモ村に行くから。ここ^二の指揮は、リザードロに任せる。解散！」

タクミの解散を合図にいろいろな人が立ち上がり去つて行く。

そして、エリスとタクミも移動し始めて

「エリス本当にいいよな？」

タクミがねんのために聞く。

「もちろんです」

エリスがはつきりと答えた。

「それならいいや。」

夜を迎える。

タクミは一人草原を歩いていると、暗闇から突如としてオオカミが現れる。

「やつと来たか。」

（なんだわしのことをまつておつたのか？）

でてきたのはフェンリルだった。

「ああもちろん。あんたに念を押して言っておきたくてな。絶対についてくるなよ！ オオカミなんてついてこれば印象が最悪になるから。」

（わかつておるわ）

フェンリルがオオカミのくせに澄ました顔をする。

「やけにあつさり認めるんだな」

タクミはこのあつさりした返答にひょっと拍子抜けした。

（エリスの成長は父親にとつて嬉しこいことだ。ただしわが娘に傷物にしたら。ただで済むとは思うなよ…）

フェンリルの鋭い睨みに負けそうになるタクミは

「や、そんなことするかよ！」

ちょっと怖気づいたように返答する。

（フン、せいぜい頑張つて…）

「おう。」

翌朝タクミヒロリスは一路ヘイモ村へに向かうのであった。

第一話 「これって、動かせるのか？」

朝日のかわいらしい時間帯は過ぎ、暖かくなってきたころ一人はダーインウッドから一路へイモ村に向かうのであった。

「それじゃあ、行つてきますね～」

エリスが満面の笑みを浮かべ、不安そうな顔を見せていなかつた。

エリスが不安な顔をしていなかつたフェンリルは、草原に寝そべりながら遠目で一人の出発を見守る。

タクミもエリスの満面の笑みを見たために心配事はないと思い。気軽に旅ができる気持ちになつた。

タクミは、無理やりいろいろなことをしているのではないかと言つことが心の重りになつっていたのだ。

しかし、エリスの顔を見てほつと胸をなでおろすタクミと満面の笑みで手を振つているエリスの一人はやがて魔王軍から離れて見えなくなつた。

リザードン^{ジョージ}は、心配しながら一人を見送つた。

ダーインウッドの深い森を抜けていく。昼前にもかかわらず薄暗い。しかし、木ときの間からかすかに見え隠れする光の線たちが幻想的な世界を作り出していた。

「わあ～～きれい～」

エリスが感嘆の息を漏らす。

「そうだな……」

タクミも歩いているがダーインウッドが作り出している光のアートに酔いしれていた。

「こんなきれいな景色初めて見ましたよ。」

足は進んでいるのだが前を見て、下を見て、上を見てと田が忙しく動き回っている。

来るときは、ひたすら逃げてきたためにそんなことを見る余裕を二人から奪っていたのだ。

「私は、幼い時から城にこもつていることが多かつたからこんな景色を見たのは本当に初めてです。」

二人が両手を使ってツルや木などをじけて歩いている時に突然エリスが話し出す。

「城にいることが多かつたのは何でだ？」

タクミは、エリスの話に乗ることにする。

「それは、お父様が中々外に行かしてくれなかつたんですね。それに外出できる時も何十人と周りに人がいて気がするなんていう雰囲気ではありませんでした。」

「あの、魔王ならやりかねん。」

タクミは小さな声でエリスに納得する。

「幼い時に風邪を引いたことがありました。その時のお父様は面白かつたです。戦場からすぐに帰ってきて、寝込んでいた私を見るや医者をどこにいるー！薬はどこだー！と大げさに言つて。しまいには、伝説の薬草を取りに行くとか言つしまつです。」

「魔王…親バカすぎるだろー！」

タクミが突つ込んだ時に草原の上に寝込んでいたフェンリルがくしゃみをする。

（誰か私の噂が伝説について自慢しているのだろう。）

まさか、自分の赤裸々な過去を話されているとは思つてもいなかつた。

「お父様が殺されてから、私はショックを受けたのですが、そんな暇もなく。一、二か月もしたら魔王城を攻められて逃げることになつて。そこで初めて本当の外の世界を知つたのかもしません。」

「本当の外の世界？」

タクミの疑問をこたえるかのよつに少し間を置き。

「私は、ずっと魔王上と言つ鳥かごに住んでいるだけだつたことを思い知らされました。そして、逃げて行く毎日を……」

「そんなに気にすることもないぞ。これから見て行けばいいだけの事だし。俺もこつちに来たばかりだからエリスと同じだ。」

タクミは、親指をぐつと伸ばして前に出す。

「でも、私とタクミさんでは違うことがたくさんありますよ……」

「大丈夫だつて、大丈夫！」

エリスが口を閉ざしたため会話がなく、やがて道に出る。

「ここが道か。意外にしっかりと整備されてるな。」

目の前の道はきれいではないのだが馬車が通れるくらいの広さは確保されており。

土がしつかりと踏み固めてあり雨が降つた時なども泥濘ぬかるみが出来にくい道となつてゐる。

「意外に、人も多いかもしれないぞ。」

「そうかもしませんね。」

二人は、そこから南南東の方角に歩き出す。

まだ、太陽が真上から少し落ちたぐらいの時間だつた。

「あとどれくらいだ」エリス？？

「たぶん、夕方辺りには着くかと思います。」

「それよりも、エリス。腹減った！」

タクミは、朝から何も食べずにお花がすいてきたころだつた。

「タクミさん、あんな所に食べ物屋さんがありますよ？」

目を凝らしてよく見てみると何もない所にぽつんとお店みたいなのが開いていた。

「茶屋…さくら？」

「よし、茶屋なら早く行こうぜ！」

タクミが走つて茶屋の所まで行く。

「いらっしゃいませ～」

そこには、桜色のショートの髪で右上の所を桜の簪かんざしがついているエリスと同じくらいの背丈せたけの女の子が挨拶してきました。さらに着物にエプロンをしている。

「こんにちは～」

「どうも」

二人して外に置かれている長椅子に座る。

「注文は何にしますよ～？」

そういうて紙がついている薄い板を渡してくる。

「何々……みたらし団子、みたらし団子、みたらし団子、もうみたらし団子しかないでしょ～って何でみたらし団子しかないんだよ！」タクミが見たのは、みたらし団子と書かれていた。

「はい～家は、みたらし団子専門店でして、後緑茶もありますよ～？」

その子が笑顔で押し売りしてきたため

「わかつたよ、みたらし団子四人前と緑茶を二つくれ。」

「まいど～」

そういうて、中に入つて行く。

数分した内に

「はい、 みたらし団子四人前と緑茶一つ。」

お盆の上に一つの皿が置かれており六本ずつ置かれている。

「わあ、 甘くておいしいです。 こんなのは初めて食べましたよー。」

「そうか？」

エリスは、 一本五つついているのをパクパクと食べている。

「それは、 ありがとうございますー。 お一人さん旅でもしているの？」
女の人が聞いてくる。

「ああ、 そんな感じだな。 それで名前は何ていうんだ？」
タクミは、 魔王軍であることを知られたくないために誤魔化して話題を変える。

「ちょっと、 お密さんナンパはやめてくださいよー」
手をひらひらさせてくる。

「そんなんじゃないつて、 我の名前はタクミだ。」

「人が会話している」とも無視してエリスは、 みたらし団子に食らいついている。

「私の名前は、 ヤエと言います。 タクミさんですか。 よりしく」「ヤエ。 よりしくー。」

「…タクミ… タクミ… つう… どこかで聞いたことがあるよ’’な…」
ヤエが一人で呟いたのだが、 タクミには聞こえなかった。

名前を聞いた後タクミも食べる」とに集中してすぐ「食べ終わる。

「ふう～」ヤハラがつぶやく

「ヨウサウセイまですー。」

「一人は、みたらし団子をきれいに食べて緑茶をすする。

「私は、エリスです。よろしくお願ひします。ヤハさん」

「これはこれはエリスさんよろしく。」

そのまま雑談みたいな感じになる。

「おー一人さんは、どこにいくんですかー？」

「ヘイモ村に行くんだよ」

「…タクミさん」

エリスが横から言つてくるがタクミからしてみればたいした情報ではないと思つていてる。

「そ、うなんですか？ それなら一緒に行きませんか？ 私もヘイモ村に行こうと思つてたところなん。」

「これって、動かせるのか？」

「のでかい、屋台を指さす。

「はい、もちろんー。」

ヤハは、笑つて答えたのだ。

第一話 「これって、動かせるのか?」（後書き）

誤字脱字、感想と評価を待っています。

第二話 「確かに…便利な茶屋だな。」

「ぐつー……重い……」

タクミは、四つ輪の大きな荷車を動かしている。

「頑張つてくださいね。タクミさん」

「頑張つて~」

二人は、隣を歩いているのだが何も持っていない。

「あの、茶屋がこんな風になるとは想像以上だつたよ……」

タクミは、茶屋の変貌をぶりを思い返す。

「まずはですね。ここに車輪を付けて」

引っかけてあつた四つの車輪を持ち出してきて、端っこの方のでつぱりの部分に着けいく。

「屋根をこうしてつと」

屋根と地面を支えている4本の木の棒を取ると屋根が折りたためるようになつた。

そして、いい感じに車輪が地面に着き移動できるよつになる。

「あとは、長椅子を…片づけてつと」

5・6人座れる長椅子を軽々しく持ちあげる。

そして、三個の長椅子を片付けていく。

「お終いつと、どうですか？これで運べるでしょ」

手をパンパンと叩きながらタクミの方を見る。

「確かに…便利な茶屋だな。」

タクミは、荷車へと早変わりした茶屋を見ながら感心する。

「これは、便利ですね~。」

エリスも口を開けながら見ていく。

「「これが、家の白麪の茶屋、さくらや。」」

ヤエは、茶屋から荷車に早変わりしたことを鼻高く言つ。

「これなら、タクミさんたちと一緒に行けるでしょ？」

「確かにそうだな。向かう場所も同じだしエリスいいよな

タクミは、元々付いて来ても何も問題はないことなのでエリスに訊ねる。

「いいと思ひますよ。」

エリスが頷いて賛成する、

「と言つことでヤエ、一緒に行こ。」

「やつたー。これで一人でさびしい思いなく、行けるー！」

ヤエがショートの髪を上下させながら喜んでいる。

「それじゃあ行きましょ。タクミさん。ヤエさんー。」

「ああ」

タクミとエリスは、

歩き出そつとするといが丘に訴えかけるような田線で言つ。

「タクミ…手伝ってくれません?」

ヤエが荷車を指さす。

「手伝つて? 何を?」

タクミは、状況がなんとななくわかつてているのだが聞き返してみる。

「本当はわかつてゐんでしょう。この荷車を動かすの手伝つてくれません?」

もう一度荷車の方を指さす。

「いや~最近、筋肉痛がひどくて重いものもつてはいけませんって、

医者に言われてるんだよ。」

「私が、直してあげましょ。」

ヤエは、拳をピキピキ音を鳴らさせてそして、手をぶらぶらとせりて準備運動を取る。

「すまん。俺が全面的に悪かったから許して。神様、仏様、ヤエ様！」

手を合わせてヤエの前に来る。

「手伝ってくれますよね？」

ヤエがもう一度聞くと

「はい…わかりました……」

そうして、荷車を引っ張るのだが、

「うう、ううーー重い！」

少しずつしか進んでいかない。

「タクミさん、頑張つてください。」

エリスが横から応援する。

「そう言つなら…お前も…手伝えよ！」

横で、必死に前に押していくのだが少ししか進まない。

エリスの歩くスピードの半分以下だった。

「タクミさんしつかりしないと、ほら進む進む。」

ヤエもなぜかエリスの横で一緒に進んでいる。

「ヤエ…何…で、手伝わないんだよ！」

ヤエがタクミに手伝つてほしいと言つたのに自分は全く何もしないでーと怒りたいのだが重くてそれどころではなかつた。

「おいヤエ、いつたい…何を入れたら…こんなに…重くなるんだ？」

？」

額に汗が流れ始めてやや下がり気味の太陽からの光が強烈にタクミを照らしている。

「それはですね。まず、みたらし団子を作るための白玉粉と上新粉に、あとタレになる醤油、砂糖とかの調味料。一番重いのは多分水

だね。」

「お前よく、今まで旅できていたな。」

「それは、あなたとは体の鍛え方が違いますから」

ヤエが胸を張つて言ひ。

「ない胸はつて…」

「タクミさん…！」

「聞き捨てなりませんね…！」

エリスとヤエが同時に怒り出す。

「…しまつた。」

地雷を踏んでしまつたとタクミは思つた。

ヤエにだけ言つたつもりがまさかエリスにまで効果があつたとは考
えていなかつた。

「ヤエさん…タクミさんなんてほつといでいきましょ…」

「そうしよう。」

二人はらんらんスキップしながら先に進んでいく。

タクミは、一瞬この荷車を置いて行こうとしたがタクミの性格的に
はそれもできず。

エリスとヤエを追いながら必死に荷車を引っ張つて行く。

「…はあー…はあー…エリス…ヤエ…少し休憩しないか?」

一時間頑張つたのだが、タクミの体力は限界に達していった。

「もう仕方ありませんね。休憩にしましょ。ヤエちゃんいいよね

?」

「仕方ありませんがここは、休んでおきましょうエリスちゃん。」

二人は、止まりタクミと荷車が来るのを待つて、荷車の中にある長
椅子を一戸取り出して三人が座る。

ヤエは、荷車から急須を取り出して、お湯を沸かして茶葉を急須の中に入れる。

お湯が暖まつたところで急須の中にお湯を入れて数分過ぎ。

急須から湯呑茶碗にお茶を注ぐ。

「はい、どうぞ」

三人分の緑茶が出来上がる。

ズズズーと一人はお茶をすすり。

エリスは、お茶をふーふーさせながら静かに飲む。

「休まるな〜」

タクミは、疲れて汗かいた後には温かい飲み物は無理だと考えていたのだが意外に緑茶が飲めることを発見した。

「ヤエ、あの湯を沸かす道具何なんだ？」

ヤエが水を沸かすのに使つたのは、現代で言うアルコールランプを大きくしたようなものだった。

「これですか？」

分厚い辞書ほどの大きさのものを指さす。

「それだ。どうやつて湯を沸かしているんだ？」

「それは、油を入れて、ひもをつるして染み込ませて燃やしているんです。少量の水ならこれを使った方が楽なんです。」

「そうなのか〜」

タクミの考えていた通りアルコールランプと同じ原理だった。

「ヤエちゃん、凄いの持つてるんですね。私そんなの見たことないですよ？」

「そんな、ほめても何も出てこないよ〜。」

「そういえば、一人ともいつからちゃん付けで呼び合つよつになつ

「なんだ？」

「それは、タクミさんがちんたらしていた時に話してたら気が合つて。さん付もいやだから、ちゃん付けにしたんです。」

エリスは、湯呑茶碗を、長椅子におく。

「そりなんですタクミさん！ねえエリスちゃん！」

何やら二人は意気投合している。

その後数分暖かい緑茶と涼しい風に当たられてゆつたりとした時間を過ぎた。

「そろそろ行くか」

タクミが、立ち上がり一人に聞く。

「そうですね。」

「行きましょ、行きましょ」

二人とも立ち上がり、ヤエは長椅子を片付ける。

「……それでなヤエ、変わってくれないか？」
長椅子を片付け、急須などをしまい終わると同時にタクミがヤエにお願いをする。

「手伝うつて？何を？」

「ヤエさん……またまた」「冗談がきついよ！」

ヤエは、ため息を一つつき。

「タクミさんじゃあ、一ヶ月かかってもヘイモ村に着かないでの変わつてあげますよ。」

「……一ヶ月つて……まあいいや、ありがとうなヤエ！」

打ちのめされて心がズタズタになりそつたが、瞬間に切り替えることにしたタクミ。

「行きましょ！」

ヤエは、荷車を簡単に引いていく。

しかもタクミとHコスとの歩くスピードと同じだ。

「す、」「いな…」

タクミは、なぜだか負けたような気がして悔しい思いをした。

そして、Hリストとタクミが歩き。

ヤエが軽々しく荷車を持つて歩き。

ハイモ村へと向かうのであった。

第四話 「百聞は一見にしかずつて言こまかし。」

太陽が沈みかける中、三人は歩いている。

「ヤエって、ヘイモ村に行つたことあるんのか？」

荷車は、タクミとヤエの一人で押している。

しかし、ヤエのおかげで大分楽をさせてもらつていてる。

「ありますよ。こちら辺の村にはほとんど行つてますから。」

「すごいな。それで、ヘイモ村つて。どんな感じなんだ？」

「人口は、数百人しか住んでいませんが、周りの村との交易が盛んなために結構人との出入りは激しいです。なので、宿とかそういう所を経営している人が多いですね。後は……いつて見ればわかるんじゃないですか？」

「いい加減だな」

「百聞は一見にしかずつて言いますし。」

妙にその言葉に納得できたタクミだった。

会話が途切れで静かに前に進んでいく。

「まだ、つかないのか？」

日が暮れかけている時にタクミがヤエに聞く。

「タクミさんが遅いからです。タクミさんがもつと荷車の押すのを頑張ればよかつたんです。」

二人で、ガラガラと荷車を引いていく。

「それは、言わない約束だぞ。」

「本当にタクミさんさえしつかりしていればいいのに」

「ヒリスまでひどいな！」

エリスまでタクミに悪口を言つ。

「対一と完璧に不利な状況へと追い込まれるタクミ。」

しかし、エリスの一言で急な終わりを告げる。

「ああ！光が見えてきましたよ！ほらあそこーー！」

エリスが斜め横の方を指す。

タクミ達も視線を向けると太陽が沈みかけているおかげもあって光がちらちらと見えている。

「本当だな！」

「エリスちゃん、さすが」

「よし、このまま口が沈まないうちに村にたどり着こう。」

タクミが荷車の押すスピードを上げ始める。

そして、太陽が沈んでいき光が良くなれてくる。

完璧に太陽が沈んだ時にようやく、村の風景が見えてくる。周りが柵で囲んであり、堀も掘られている。

「これを村つていうのか……どう見ても町にしか見えないんだが……タクミが少しスピードを落としつつ町の風景を見ている。

「確かに、町だと思いますよ。」

エリスも外の風景に釘づけだ。

「だから、言つたでしょ。百聞は一見にしかずだつて」

ヤエが、自慢げに一人に言つ。

タクミは、簡単にうなづくだけだ。

そして、三人は、門をくぐる。

「ヘイモ村に到着つと。」

門を入ると大きな路が出来ておりそこには様々な店や宿が立ち並んでいる。

「ヤエ、一回来たことあるならどこか宿ないか?」

「荷車を人に当たらぬように少しずつ動かしていく。」

「それなら、家のオススメの宿屋があります。」

「

「それなら、家のオススメの宿屋があります。」

「ヤエについて行く。」

大路地から少し離れて小さな路に入ったところに宿屋があった。

「ここです。」

宿屋の前で止まる。

「少し待ってくださいね。」

ヤエが宿屋の中へと入って行く。

タクミとヒロスは、荷車と共に待つていると扉を開けて出てくるヤエ。

「空いてました。この荷車をこつちに持つていただきましょう」

荷車を裏側に回して表に戻り宿屋に入る。

「いらっしゃいませ~」

そこには、着物姿の人がいた。

「ようこそ。こちらへどうぞ」

着物の女人に連れられて部屋に案内されている。

「ここです。」扉を開けてはいると8畳ぐらいの広さの部屋があった。

そして、真ん中で区切れるようになつてている。

「では、じゆつくづびづべ。」

「少し、せまいかな……」

タクミが不満を漏らすが

「ここから辺の宿は全てこれぐらことです。贅沢言わないでください。」

「やうなのか?」

「やつなんです。」

タクミは、必要最低限持つてきた荷物を置き座布団の上に座る。エリスもそれに真似て座る。

三人は、しばしの休憩をとったのちよゐるゝ飯を食べに出かける。

「なんで俺がおいらなきゃならないんだよ！」

タクミは、タクミとエリスの分とヤエの分を別々に払おうとしたのだがヤエが払わずに店を出て行ったためにタクミが払わされることになる。

「宿の案内とかしたんですから、そんな固ここと言わないでくださいよ…ね。」

そういうて、夕飯をたかられる。

そして、太陽が昇り次の日を迎えると

「宿代まで俺が払うのかよ！」

てっきり、前払いでヤエが払ってくれたと思っていたのだが違ったらしい。タクミが払うことになつていて。

「はあ～わかったよ」

結局タクミはヤエに宿代までたかられることになつた。

「お金をたくさん持つてきて正解だった。」

タクミは、ヘイモ村に向かう前にリザードロ^{ジョーブ}かた結構の重さの袋を渡されている。

その中には、お金が入っていた。そして、このお金はどうしたのかとタクミが聞いてみると

「魔王上以外にあつた宝石などをかき集めて売つたお金をダーイン
ウッドに隠していたんです。だから、このお金を使って説得を成功
させたださいよ」

そう言われてリザードンからもうひつたのだが。

今、使い道が少し違つた方向で出費してしまつた。

「ヤエおぼえとけよ！」

タクミが少し睨むだがそんなことを無視するヤエであつた。

「私は、これからお店を出すんですけどタクミさんは、びりするん
ですか？」

ヤエが荷車を表にしてからタクミに聞く。

「まずは、観光だな、せつかく来たんだし。エリス行くぞ。」

「は、はい」

タクミとヤエは、いつたん別れ、タクミ達は、ヘイモ村を観光する
ことにした。

第五話 「まだちな感じですね。」

タクミとエリスは、大路に出る。

昨日の夜も人が多かったのだが、朝も相変わらず人が多い。周りをよく見て歩かないとすぐぶつかりそうになるほどだ。

「タクミさんあれなんですか？」

エリスが指をさしたのは林檎飴を売っているお店だった。タクミもここに来る前の物と同じだったためにわかった。

「あれはな、林檎飴だな。」

「林檎なんですね。」

エリスは、つばを飲み込んでいかにも食べたそうな雰囲気を作り出す。

タクミもさすがにそのことに気付く。

「わかった。買いに行こう。」

林檎飴の売っているお店に行こうとする。

「本当にいいんですか？」

「ああもちろん」

「本当の本当にいいんですね。」

エリスが何度も念入りに聞く。

「さあ、早く行こうぜ。」

タクミは、エリスがあらあらしていたため手を引っ張つて林檎飴屋の前まで来る。

「おじさん、林檎飴一つ頂戴。」

いかにも屋台で売つてそうなおじさんが林檎飴を売つていた。

「はい、どうぞ。」

お金を渡して林檎飴を貰いエリスに渡す。

「はい、これ」

エリスが、タクミから林檎飴を貰うと赤色で周りを砂糖でコーティングされた林檎をまじまじと見て いる。

「これが…林檎飴…」

何度も周りを見てい るエリスを見てタクミはほえましい感じになる。

「早く食べろよエリス」

怒つたように言つたのだが語氣は意外に優しい感じだつた。

「食べますね…」

林檎飴をペロッと一口なめる。

「これおいしいですね！」

その後は、続けてペロペロとなめ始める。

エリス何度もおいしいおいしいと言つて いるのが面白い。

さたに、林檎飴を売つていたおじさんまで後ろから暖かい目線でエリスを見ていた。

あつという間に食べ終わりエリスは満足そうな顔をする。

「おいしかったか？」

「もちろんです！」

大きくなづいた。

「それならよかつた」

なんだかこっちまで満腹になつたとタクミは思つた。

二人は、大路の様々な出店を回つて行つた。

その一軒一軒でのエリスの反応が面白くタクミは何気にこの出店周りを楽しんだのだ。

一つずつ回つて行くと途中で。

「タクミさん、あれつて」
エリスの指さす方を見るとよく見慣れた出店があった。
その店人近づいていく。
ある人物に声をかける。

「よつ！調子はどうだ？ヤエ。」

タクミは、ある人物・ヤエに話しかける。

「ぼちぼちな感じですね。」

客は、5人いてそれぞれ長椅子に座つてみたらし団子を食べている。

「それならよかつた」

タクミが出てこいつとする。

「タクミさんにエリスちゃん」で一休みしてはどう？

タクミの袖を引っ張る。

「でもな～」

タクミが答えを出しかねて「とヤエが袖をくいくいと引っ張つて
いる。

「タクミさん、ここで一休みしましょ～よ～」

エリスまでもう一方の袖をくいくいと引っ張つてくる。

「ああー、わかつたから一人とも離せつて」

「まいど～」

「やつた～」

二人は別々の事を考えてタクミの袖から手を離す。

長椅子に一人は腰を掛けて

「みたらし団子一人前と緑茶を頂戴。」

「わかりました～」

ヤエが、屋台の暖簾をくぐつて中に入つて行く。

三、四分もしたらヤエが出てきて

「どうぞ、みたらし団子四人前と緑茶一人前です。」

お盆の上に一つの皿と湯気建つて いる湯呑茶碗を渡す。

「俺は、一人前と頼んだはずなんだが… またぼつたくるつもりか！？」

「人聞きの悪い。誰がぼつたくるんですか？ サービスに決まってますよ！」

ヤエが悪びれもせず言ひ。

「はあ～、人聞きの悪いのはどうちだよ… サービスならありがたくサービスされておくな。」

「ありがとうヤエちゃん」

タクミとヒロスは、みたらし団子を食べて緑茶を飲む。

あつといつ間に団子がなくなり、緑茶をうちまぢま飲む。

ヤエがタクミの隣に座る。

「おいおい、いいのかよ。お店の方は？」

「今は、お客様も少ないですしだ丈夫ですって。」

先ほどより人は減り今は、二人しかいなかつた。

「ヤエ、こここの村長の名前なんて言つうんだ？」

「こここの村長ですか？ 確かゴンじいさんつていつ名前で慕われいたはずです。」

ヤエが上を見つつタクミの質問に答える。

「ゴンじいねー。それでその村長さんはどこにいるんだ？」

「確かに、小路地の奥の小さな家に住んでいるはずです。」

ヤエはタクミの質問に何も疑問を持たずに入答える。

「村長がそんなところに住んでいるのか？」

タクミはもつとでかい所に住んでいるのかと思つていたのだがヤエが言つたのは小さな家と聞いて少し想像と違つた。

「ゴンジーさんは、もう引退したとか言って政治関連にはまったく手を出しませんね。ただしアドバイス的なことはしているらしいんですけど。」

「なるほど…」

タクミの中でゴンジーを説得する方法を考えつつ緑茶を飲みほした。
「「うちそん。ヤエありがとうな。行こうぜエリス」

「どうも、股のお越しをお待ちしています」

ヤエが手を振りながら二人を見送った。

二人は、観光を終えてヤエと合流したのち昨日と同じ宿屋にとまつた。

ただし、宿代は別々にした。

三人は寝ることにした。

フレイヤが畏るとオーディンが頷く。

「千夏さん後あと魔王軍討伐の他に山賊の排除もお願いしたいの。」

「山賊ですか？」

千夏が首をかしげるとオーディンが言葉をつづける。

「最近、人族魔族の両方が山賊行為をしている。だからあなたたちに討伐を依頼したい、いいかしら？」

「わかりましたよ。」

「ははっ」

「了解しました」

三人が異なる返事をして部屋を後にすることであった。

第六話 「俺たちは、この村を賣いに来た」

翌朝、二人は村長のゴンジーの家に行く」とにする。ヤエは今日も大路に店をかまえるために別々になる。

タクミとHリスは、薄暗い小さな路地を通る。

そこは、人の居住区域で洗濯物が干されたりしている。しかし、太陽が届いていない。

タクミとHリスは、薄暗い路地を抜けると少し光が入つてくる開けた場所があった。

「確かにここを右にいったところにあつたはず」

タクミは、ヤエからもらった地図を見ながら進んでいく。

進んでいくと少しずつ家の広さがでかくなつてきている。

「ここか…」

地図で赤丸が記されている場所に到着した。

家を見ると一戸建てなのだが、周りと比べると極端に小さい青色の屋根に周りは白色で塗られている。

「ここが、ゴンジーさんが住んでいる家ですか…」

エリスは、顔を上に向けながら家を眺めている。

「エリス、ボケツとせずに中に入るぞ！」

「誰がボケツとしているんですか！誰が！」

エリスが抗議しているがタクミは無視して家のドアを一、三回叩く。

ドンドン。ドンドン。

タクミは、ドアを叩いても返事がないため、足を思いつきりあげて蹴ろうとする。

ガチャ

「『ジ』の『じ』つが人の家のドアを壊し路る奴は…」

白髪でひげを長く生やしたおじいさんが出てきた。

「あの、私たち村長さんに会いに来たんです。」

エリスがタクミの一步前に出てきて白髪のおじいさんに話しかける。

「わしが村長だが何か用でもあるのか？」

村長がいきなり出てきたことに驚いたのだがエリスは立ち直り。

「村長さんでしたか。お話があつて会いに来ました。」

「何だ？ また何かの押し売りでもする気か！ そんなのたりとるからいらんわ！ 帰れ！」

ゴンじいが手でシッシリとする。

「俺たちは、この村を貰いに来た」

タクミが今まで黙っていたのだが言った。

そしたら、ゴンじいの目が少し変わる。

「この村を貰いに来たのか。『ジ』の『じ』つがほぞくー。」

ゴンじいが今までの語氣とは、つって変わつて威嚇するよひに強く言つ。

「俺たちは、魔王軍だ。噂くらゐは知つてゐるだろ。人族の部隊を破つたつてことぐらいは？」

挑発氣味にタクミが話す。

「あの魔王軍か…何でもものすごい力を持つて魔王が再臨したとかそんな噂が流れてあるの。しかし、お主たちが魔王軍だという証拠はあるのか？」

ゴンじいが顎に手を置きさすりながらタクミに聞く。

「証拠なんてないさ。あるのは事実のみだ。噂がどうだか知らないが。俺たちは村を取りに来たんだ。そのためにわざわざこっちから話しかけてきてやつたんだ。」

「ちょっとタクミさん！」

エリスが慌てふためく。

「ほほほ、若造に何ができるというんだ！？突然この村を取りに来たと言つてもただのアホが叫んでいる事と変わりないわい！」

ゴンじいの口から唾が飛ぶ。

「若造が考えた結果が話し合いだ。村長さんに選ぶ選択肢は二つだ！一つは、このまま話し合いで魔王軍に引き渡してきれいなままこの場所が残るのか。戦つてこの村が焼け野原になるのかだ。」

「若造と認めたうえで、その選択肢を迫つてくるか…お前とは話してみる価値があるかもしけんの。入つて茶でも飲んでいけ。」

ゴンじいが扉を開けたまま中に入つて行く。

「それじゃあ、エリス。茶でも飲んでいくか」

タクミも開きっぱなしの扉の奥へと進んでいく。

「えつ、えつ。ちょっとタクミさん！」

エリスも慌てて中に入り扉を閉めてタクミの後に続く。

中は、古ぼけた外装に古い机といすが四つあった。

そのうちの一つに、ゴンじいは座つている。

タクミとエリスも椅子に腰を掛ける。

「爺さんが誰かを招くなんて珍しいこともあるもんだい。」

奥から腰が曲がつているお婆さんが出てくる。

その手には、お盆と三つのお茶を持って出でてくる。

「お前は、あっさりに行つておれ。邪魔だ」
ゴンじいが言うと、お婆さんはお茶を置いて

「ゆっくりしていいってくださいね。」

優しい一言を述べて奥に下がつて行つた。

「それは、詳しく聞こうとしようか。ほれいつて見る。」
お茶をする。

「俺たちは、魔王の旧領土を取り戻すために戦つている。ただそれだけだ。」

「何で、この村が最初なのだ。」

「そりゃあ、大は小を兼ねるって言うだろ」

タクミとゴンじいの会話をエリスは真剣剣に聞いている。
「大は小を兼ねるか… それで、お前の望みはなんなんだ。魔族だけの土地でも作るのか？」

「いや、魔族と人族そして神族の世界を作るために戦うんだ！」

タクミはゴンじいの質問にすぐに答える。

「共存の道を望むか。しかし、今でも共存できていない者どもが多いぞ。この村だって元々魔族と共存してたがために追い出されたものも少なくはない。」

「それでも、その人たちも生きようと必死になつてこの村が出来たんだろ。それならまた手を取り合えるはずだろ。魔族と人族が。」

タクミが必死に説得しているのだがゴンじいはなかなか納得しない。

「この村が出来てもう一年は過ぎようとする… それは、魔王が死んだ時期とちょうど重なるのだ。その意味が分かるか? しょせん魔王なしには魔族は成り立たないのだ。」

「……どうか…エリス一年も逃げ回つてたのか?」

「そうです。」

タクミは数週間だと思っていたのだが一年もたつていたのに驚きを隠せないでいた。

「その間に、あなたを召喚するための材料を集めてたんです。」

「なるほどな」

二人は、小声で話し合つた。

そして、ゴンじいの方に向き直り。

「それは、魔王と言う象徴が死んだからだ。まだ、基盤が盤石じやなかつたから招いた結果なんだから。今回は違うぞ。何だつて俺は死なないからな。それならいいだろ」

タクミが胸を張りながらゴンじいの問いに答える。

「それは、面白い。しかし皆がどうやつたら納得するのじや。」

「そんなのは、今から考えて行けばいい。この先長く住んでいくのだから。時には喧嘩もしてもいいと思つ。そつやつて手を取り合つて仲良くなれば今まで以上に良いものになるはずだから。」

「ほおー。なぜに闘つ決意をした。」

タクミは答えようとしたのだがエリスが真っ先にこたえる。

「それは…みんなが平等で楽しく暮らせる世界を作るためです…！」

「平等で楽しくか…しかし、今だつて何回も戦いは起きている。そ

れこそ人族同士。魔族同士だつて。」

ゴンじいがエリスの発言を否定的に言つ。

エリスが胸の内に貯めた思いをぶちまけ。

「力は、力です。でも、武器を手に取るのではなくて、隣の人の手を取るんです。力の使い方は、時には害も及ぼすこともありますが、その害をどうやって善にするのがが大切なんです！害は別に悪いことでもない。本当に悪いことは、善にしようとする努力しないことです！」

「善にするために努力をする…だから、お前さんは、戦いあって差別している害を、戦うことによつて善にするつもりか？たとえ、どれだけの血が流れても。」

エリスが下を見たがすぐに顔を上げて

「もちろんです。たとえどれだけの血が流れても、道を進んでいくしかないんです。でも、やっぱり…血はあまり見たくないの、説得と言う方法を取つたんです。」

「まあ～

ゴンジイが考えるそぶりを見せる。

タクミは、エリスの思いをただ黙つて聞いていた。

第七話 「何で、そんだけ納得が出来たんだ？」

「一人とも面白い…しかも、しつかりとした意志もあつたからのう。さてどうしようか…」

独り言のようにぶつぶつと呟いている。

「じいさんや、協力してやつてもいいかもしませんよ」

突然茶を持ってきたお婆さんが現れる。

「しかしの～」

「じいさんがここまで悩むなんて結婚してから見たこともありますからね～何か面白いことでも見つけたんでしょう」

二人ののんびりした会話を聞いている一人。

「この一人にかけてみるのも面白いかもしけんの～。ばあさんいかの？」

「何も口出しさしませんよ」

お婆さんはまた奥に戻つて行つた。

「よし、お前らに協力してやるわ。」

エリスとタクミの方を見て言つ。

「本当ですか…」

エリスが立ち上がり手を机に置く。

「本当にわい。お前たちにかけてみよ」と思つからぬ～フォフオ
フオ～～

エリスがタクミの手を握り。

「タクミさんやつましたね！」

エリスがとても喜んでいる。

「ああ、そうだな。」

タクミは、エリスに手を握られてふんぶんさせられているために動けないでいる。

「それで、村長さんこれからどうするんですか？」
エリスがさつそく本題を聞く。

「今の時間なら…」

「ゴンじいは、古ぼけた時計を見ながら考えて
「よし、ついてこい。ばあさん…ちょっと出かけてくる。」
「いつてらっしゃい。」

「ゴンじいが椅子から立ち上がり玄関へと向かう。

それを追つて二人も駆け足で追いかける。

「どこにいくんでしょう？」

「さあな？」

「ゴンじいが扉開けて出していく。

二人もそれについていく。

「ゴンじいさんの歩く速度はなかなか早く。

二人は駆け足気味な感じで追いかけて行つた。

小さい道からいろいろな曲がり角をまがつて大きな建物の前に着く。

「ここじゃわい。」ゴンじいは、一人と歩幅を合わせて門をくぐる
うとする。

「これは、村長様ですか。いかがご用事で？」

門を守つている衛兵に敬礼されて質問される。

「重大な用事だ。この封たりもとおしても構わんna？」

「はい！どうぞ…」

衛兵は、そのまま門の前まで戻り通常通りに周りを見渡している。
でかい門のを開けて中に入つて行く。

二人も中に入つて行くと赤いじゅうたんに豪華なシャンデリアスが

つるしてあつた。

「わあーすごい…」

エリスが上を見ながら口をポカツと開けている。

「ほれ、二人ともついてこい。

「ゴンじいは、さつさと前に歩き出す。らせん状の階段を一段一段登つて行き、廊下に出ると衛兵が一人いた。

「何者だ！」

一人の衛兵が大きな声で威嚇する。

「わしは、村長だ。お前たちの日はふしあなか！」

「これは、失礼しました。」

ゴンじいは、カツを入れると衛兵は慌てて誤る。

「それと後ろから付いて来ている一人もとおせよ

「はい！！」

二人の衛兵は、同時に敬礼をする。

村長さんつてすごいですね。」

「人は見かけによらないな」

二人は、ゴンじいの後ろについてきながらある部屋の扉の前に立つ。

「それでは、入ろうか」

ゴンじいがそういうと、扉が一気に開く。

中には、若いガタイのいい人から年を取つたご老人まで様々な人が丸いテーブルの前に座つている。

ゴンじいが入ると一斉にそちらの方に視線が集まる。

「これは、村長。今日はどういったご案件で？」

一番奥にいたメガネをかけた中年の女性が突然現れた村長に驚きながらも冷静に聞く。

周りに人も自然と村長の発言を聞こうと耳を傾ける。

「今回の案件は、ちまたに噂が流れている魔王軍に協力するといふとだ。」

ゴンじいが前置きもなく言うと周りが騒然とする。

隣同士で話し合っている人の姿も見受けられる。

一番奥にいるメガネをかけた女性だけが机に手を置き黙つて考えている。

数分沈黙が流れた後でメガネをかけた女性が口を開いた。

「それは、どういうことなのでしょうか？」

周りの人たちもその言葉の返事を聞くために静かになり視線がもう一度村長に集まる。

エリスとタクミは、ゴンじいの後ろで固まつていた。

「それは、この二人の若者にかけてみたいと思つたからじゃ。この二人は、魔族と人族の共存を望んでいるのじや、だからわしも協力したいと思つただけじや。わかつたか？カリサ」

「はい分かりました。」

メガネをかけた女性：カリサが頷く。

「村長がそこまでいいうのなら私は賛成しましょう。」

カリサの言葉に周りがもう一度騒然となる。

タクミとエリスも驚いている。

カリサの決断がとつても早かつたからだ。

「カリサは、賛成してくれるか。他のものはどうだ？」

ゴンじいがうんうんと首を振りながら他の人たちになげかける。

「それなら、俺もいいと思う。」

「あたいもそれでいい。」

「そうだな。カリサ姉さんとゴンじいさんが言つなら賛成だ。」

周りから賛成の嵐が巻き起こる。

「でも、民衆に一応は聞いておかないといけないわね。すぐに手配させないと。」

カリサが、素早く動き出して、部屋に人を呼びその人に何か話すとその人は、すぐに部屋を出ていく。

ここで、初めてタクミが口を開く。

「何で、そんだけで納得が出来たんだ？」

タクミにとつてはゴンじいの一言で全ての議論が一瞬で片付いてしまったことに驚き。

何の疑いも抱いていないことを疑問に思つた。

「それは、ゴンじいの事を信頼しているからよ。この村を復興させたのもゴンじいのおかげなの」

カリサが何の曇りのない声で言ひきる。

「この村は、魔王と神族との戦争で一回焼け野原になつていての。でも一回ともゴンじいのおかげで立ち直り。今ではここまで大きくなつたの。だから私たちはゴンじいを信じているの。」

カリサが言葉をつなぐと周りの人たちも頷く。

「信頼第一だな。」

タクミが感心して、エリスが何も言わないまま会議は進んでいく。村長の一言で次々と決まって行き。

明日には、民衆の返事を聞いたのちに決定するとゴンじいが言つたために二人は、宿に戻る。

次の日の晝過ぎには、賛成で民衆がまとまつた。

全てゴンじいの一言があつたからなのだ。

ついに魔王軍は、ヘイモ村を手に入れれる事が出来た。
大きな一歩を進む事が出来たのだ。

第八話 「またいつか会えるや」

住民の投票により可決されたとき「タクミ」はエリスは、「ゴンジ」と一緒にいた。

「どうじゃー。わしの力は！」

「ゴンジーが腰を曲げて高笑いしている。

「さすがです。」ゴンジーさん」

エリスはいつの間にやら「ゴンジー」と仲良くなつていて、ゴンジーは孫のようにエリスと話をしている。

タクミにだけは冷たかった。

「ここまで喜ぶ爺さんを久しづりに見るわい。」

お婆さんもその時に近くにいて「ゴンジーの姿を懐かしそうな田線で見ている。

「ところで、エリスにタクミは、これからどうするのじゃ？」

「これから、魔王軍のいる森まで戻つて話をしてから魔族を連れてこようと思つてる。」

「ゴンジーの問いにタクミが答える。

「それなら、他の村にもはなしにいかな「やせんとな」

「確かにここだけではだめだろつな。」

「ゴンジーが後に会つた棚から地図をひっぱり出してきて広げる。

「ここがヘイモ村じゃ、そしてここに青い点がうたれていますのが数百人規模で、赤が数十人規模の村じや」

指をさしながら説明している。

「すごいな……こんな地図があるなんてな」

「わしが作らせたんじゃぞ。わしが」

地図を少し上にあげて囁きながら自慢をするが埃が舞う。

「それでじや、どうするのだ？」

「そりや、全て説得に行くに決まつてゐるだろ。」

タクミが間髪入れずに言つた。

「そかそか、それならわしが手紙を書いてやるからそれを持ってい
けそうすれば納得してくれる村もあるだろ。」

「ありがとうございます。」

エリスが地図を持つ。

「それなら俺たちは一度、魔王軍の所に戻るから手紙をよろしく。」

「わかつた。明日までに何とかしよう。」

紙と筆を出してくる。

「それなら明日またじこさん家の家まで行くな

「まつとるは

「ンじいと別れて扉から出ようとしたと

「ありがとうね。またいつでもおいでよ」

お婆さんがにっこりと笑いかけてきた。

「もちろんー！」

「もちろんです！」

二人は返事をして建物から出た。

「これからどうします？」

エリスが歩こうとしているタクミに聞く。

「そうだなー」

タクミ達の上にある太陽はまだ高い。

「どうせだからやの所にでも行くか？」

タクミが振り返りエリスに聞く。

「いいですね。」

エリスも頷き歩幅を合わせて大路へと向かつた。

「どうであるかな」

タクミが周りを見渡している

「あれじゃないですか？」

エリスが指をさす。

そこには、ヤエの姿が確認できた。

「いたいた。」

タクミとエリスは、ヤエの所まで歩いてこ。
「ヤエ元気か」

タクミが声をかけるとお盆の上にみたらし団子を持ったヤエが振り向く

「タクミわざにエリスちゃんいらっしゃい！」

「第一声がそれかよ……」

タクミが長椅子に座る。

「まあいいじゃないですか」

エリスも長椅子に座る。

「注文は何にします？」

「それならみたらし団子一人前に緑茶を二つな

タクミがすぐに答える

「わかりました~」

ヤエが、店の中に入つて行く。

「タクミさん、ヤエちゃんには話がないんですねか？」

ヤエがいなくなつたのを見てエリスがタクミに聞く。

「言わない方がいいだろ？ それにこれから戻るんだからお別れだ
な。」

エリスは、残念な顔をする。

「せっかく仲良くなれたのにお別れなんですね。」

「またいつか会えるわ」

「そうですかね…」

ヤエがお盆を持つてみるとエリスの顔が少し明るくなる。

「はい、おまたせ。」

長椅子にお盆を置く。

「ゆっくりしていつてくださいね～」

ヤエがすぐに別の所に行く。

「今日は忙しそうだな。」

周りを見ると長椅子は人でいっぱい、歩きながら食べる人などもみたらし団子を買って居る為ヤエは大忙しだった。

「大変そうですね。ヤエちゃん」

「そうだな～」

エリスは心配そうに八重を見ながらみたらし団子を食べ。

タクミは、客になりきつて茶をすすっている。

数分で食べ終わってしまった。

「何回食べても飽きないな。」

タクミは、何回もみたらし団子を食べているのだが意外と飽きはしなかった。

「確かに何個でも食べれますね。」

エリスも頷きながら同調した。

「ちょっと手伝うか?」

「いいですね」

タクミとエリスが同時に頷く。

「おー、ヤエ。手伝うよー。」

タクミとヒリスがヤエの前まで来る。

「本当！？助かる！それならヒリスちゃんは注文を受けるのをやつて。タクミさんは会計やつてください」

「了解」

「わかつた」

二人はエプロンを借りてそれを付けてお店の手伝いをした。あつという間に時間は過ぎていき気が付くと太陽が傾きかけ真っ赤な空を作り出していた。

「ありがと」

ヤエは店じまいをして荷車へと変えた。

「どういたしまして」

「それじゃあ、宿に行くか」

タクミは荷車を押して宿に戻る。

夕食を食べて一夜明ける。

タクミはヤエにお別れをしよつと探してみると宿の女将さんと話しているヤエを見つけた。

「ヤエいたい」

タクミの声に気付くとヤエと女将さんは話すのを終えてヤエがこちらに来た。

「ヤエ女将さんとの話よかつたのか？」

「このあたりのむらについてきいたんですね。」

ヤエがタクミに地図を見せる。

「それで何か御用ですか？こんな朝早くどうしたんですか…まさか

朝這い！？

ヤエは、手を頬に当てる。

「いつたいどうしたら、やうこつ考えになるんだ？しかも、夜這いじゃなく朝這いつてどうこつことだよー。」

「冗談ですよ冗談」

ヤエが今度は手をひらひらさせる。

「俺たちは今日この村から旅立つから別れのあこがれでもしあつと思つてな。」

「そなんですか。エリスちゃんとお別れはさみしいですけど。頑張つてください」

ヤエが少し残念そうな顔をする。

「ああ」

タクミとヤエが話しているとエリスがこひらく。

「タクミさん探してたんですよー。」

「すまん、すまん。俺もヤエを探してたんだ」

その一言で状況がわかつたエリスはヤエの方を向く。

「お別れですね。元気にしてくださいね。」

ヤエとエリスは手を握りしめあつ。

「エリスちゃんこそ、元気でね。まだどこかで会おうね

「もちろんです！」

たつた一言二言でお別れの話は終わつたのだがそれは一人にとつては大きなものになつたのだ。

「それじゃあな、ヤエ！ エリス行くぞ」

「ヤエちゃん！ またね！」

「タクミさんにエリスちゃんもまた会いましょうー。」

朝日がの見え始めたころにタクミとエリスが宿を出てヤエと別れたのだ。

「ゴンじいから手紙をもらつために家へと向かつ。

「じいさんいるかー！」

「ゴンじいの家の前まで来て玄関を叩く。

「いつたい何時じやと思つとるかー！」

「ゴンじいが扉を思いつきり開ける。

「じいさん。準備できてるか？」

「ゴンじいさんおはよつじやこます。」

「ゴンじいが奥に振り向く。

「当然できておるわい。待つておれ」

そう言つて中に入つて行つた。

お婆さんが奥の部屋から入れ違いで出でくる。

「じいさん、昨日は張り切つて手紙を書いておつたわ。見てるだけで面白かったの～」

婆さんがそういつとゴンじいが数十枚の手紙の束を手に持つて戻つてくる。

「つるやこ」と言つた

「はいはい」

また婆さんはすぐに奥に入つて行つた。

「これじや

「すごい数だな」

手に渡された手紙の束はかなりの重さがあつた。

「それで大丈夫じやうつ。あとは頑張つてくれ。」

「ありがとうございます、ゴンじいさん」

「ありがとうございます、ゴンじいさん」

二人は挨拶をした後家を離れて行つた。

後ろからはゴンじいの笑い声が小さく聞こえた。

そうしてタクミとエリスはヘイモ村から一路ダーランウッドに戻るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7366x/>

魔王と勇者のタクティクス

2011年11月23日17時55分発行